毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治三十年六月十日發兌

第百參號

社告

德富蘇峯本月廿八日頃橫濱着歸朝仕候間爾後の本紙には續々同人の新稿記載の期可有之候伏して愛讀を祈る

六月　家庭雜誌社

芳賀八彌著

◎本書には家光の家庭的發育の新面目記事最も多し◎

德川家光

附 由井正雪

定價廿五錢
郵稅四錢

彼は野生の駿馬なりき、野生の駿馬は如何に馴致せられて良將軍となりしか、如何なる政策を執りたりしか、如何にして戰後の經營てふ大任を成功し得たりしか、彼は積極的人物にして消極的政策を行へり、保守的鎖國策より更に進んで猛烈なる鎖國主義と一變せり彼は餘りに全力を注ぎたりき、驕兒を嚢中に入れて餘りにその口を壓迫したりき＝急先鋒第一の革命見たりし由井正雪は即ちその大嚢を破壞せんとして起てり、起たんとして遂に斃れたりしなり、隨て事實の雄壯快絕なる恰も波瀾萬丈の勢あり、筆鋒亦鋭利嶄新實に近時に於ける歷史壇上の傑作なりとす。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

乾坤一布衣著

社會百方面

定價十五錢
郵税四錢

社會を考究するは目下の急務也、議論に由らず實際に就て、而かも今日の所謂社會問題多くは是れ學者先生の推理抽象の論に流るゝの弊なしとせず、此書眇然たる一册子に過ぎずと雖も其記する所は皆實際社會にして他の議論抽象の書に比して自から面目を異にする所あるべし。

目次――貧童の墮落○支那風俗○臺灣風土記○朝鮮風俗記○足尾銅山○晩商●納豁師●旗師●什麽物師●見世物師●古物商●贓品買●アラボシ○椋鳥●騙詐の內幕○居職人の內狀●資本主と手工者○塵寰雜爼●細民生活抄記●醜窟の半面

●大日本　此書は嘗て『最暗黑之東京』を著はして社會的觀察の周密を以て知られたる乾坤一布衣氏の著はす所。全篇皆な社會を裏面的に觀察せる所に係はり、一の空文字なし。所々著者慨慨の情逸して痛切の言を爲す。一たび之を讀む、讀む者誰か細民問題を研究するの急務なることを悟らざるものあらん。貧民は如何にして生活せりや、貧童は如何にして成長するか、細民生活の爲めに社會は如何なる影響を蒙るべきか、貧民の爲めに社會の道德は如何に腐敗するに至るべきか、之を知らんと欲するものは、此書を繙讀せざるべからず。讀者は之を讀んで豫想外の事實、社會の下層に隱伏せるに驚かん。當今細民問題の攻究日に月に盛にして、世人もやゝ其急務を知るに至れり。これ社會進歩の途上當に伴ふべきとなり。此書此問題に就て學理的方面を說かずと雖も、其實際的觀察によりて、之に關する攻究の材料を備ふるとの點に於ては、其功亦た大なりとす。苟も社會問題に意を注ぐ者は、必ず一讀すべきものなり。

●早稻田文學　松原乾坤一布衣が近ごろ『國民』へ載せたる例の社會的記事を輯めたるもの、貧窟の罪惡に陷る道行、居留地の風俗、溪北及び慶尙道の通信、足尾銅山の有樣、晩商のくさ〴〵、椋鳥と稱する詐欺師の內幕、居職人の事、細民の生活、遊廓の裏面などを平叙す、同じ著者が筆に成れる『最暗黑の東京』を讀みし者は亦この書の有益にして且つ多趣味なることを疑はざるべし

●女學雜誌　『最暗黑の東京』の著者松原乾坤一布衣氏は、下流社會の事情に精通するを以て稱せられ、彼書の如きは、既に英譯せられて出版せられたる程なり。氏の新著『社會百方面』は、これまで國民新聞紙上等に見えたるものを拔萃摘錄して、其精細の度も亦、前著に及ばずと雖も、なほ以て東都下層社會の各方面を觀察するに足る。附錄醜窟の半面は、ことさらに書簡文体を用ゐて、頗るもの足らぬ心地せらるゝと雖も、醜窟の一斑を窺ふに便りよし

東京　民友社發行

新刊書發賣

木戸孝允

定價廿錢
郵稅四錢

本社出版の傳記評傳各書は世已に定評あり、其今日に至り重版續出、盛に世の需めに應じて止まざる以て各書の價値を評定するに足りぬべし。今本書「木戸孝允」評傳刊行成る、此書孝允の成長より起り、其の艱難備さに嘗め、遂に維新の鴻業を翼成するに至り、記事詳密、筆鋒周匝。附するに諸建白書及詩文を以てす、皆是れ經國慨世の大文字也。

德富健次郎著

十二文豪第十卷

トルストイ

（肖像入）
定價廿五錢
郵稅四錢

トルストイは實に露國の一異物、のみならず世界の奇觀である。其國柄からしても、文豪としての位置からしても、所謂トルストイ宗の開山たるからしても、今日に比類なき興味を有する人物である。著者の不學無術あへて其面目を詳悉したとは云はぬ。併し微弱な力に出來る丈は盡した積である。讀むも讀まぬも諸君の御隨意とは云ひながら、若も今迄一卷として世に出でたことのなひトルストイの一生を兎に角一卷にまとめて、誠實に描かんことを試みた此「トルストイ」の一讀を諸彦に推薦しなければ、著者は諸彦に對して不忠實なるもの、徒讓徒遜なるものであらふ。故に是非〳〵諸君の一讀を請ふのである。

最新刊

幸田露伴序
角田柳作著

井原西鶴

定價廿錢
郵稅四錢

文をいふもの誰か井原西鶴の名を記せざらん。既に其名を記す。又彼に就て學ぶ處なかる可らず。去れど今日坊間に流布する處の傳記の如き。或は彼か斷篇片墨の如き。共に彼が面目の精細を知るに足らず。今や著者が優麗の筆をかりて此一編成る。章を分つ十。曰く小傳及著作。浮世草紙概論。西鶴の人物。西鶴の詩才。西鶴の文章。時勢。俳壇の失敗。結論。評論。文學史上の西鶴これなり。其價値の如何に至つては。暫く江湖の評定を待んかな。

抒情詩

定價貳拾五錢
郵稅四錢

抒情詩は國木田哲夫の『獨歩吟』松岡國男の『野邊のゆきゝ』田山花袋の『わが影』太田玉茗の『花ふゝき』嵯峨の山人の『いつまで草』宮崎湖處子の『水の音づれ』より成る。

抒情詩は今日猶未だ米に値せす、而して吾人の之を作るに止むを得ざるは、吾人の生涯米の外一日の詩なき能はざるを以てなり。抒情詩は眞情の聲なり、之れを梓して江湖に示すは、眞情を以て眞情を得、之を以て聊か寂寞の情を慰せんと欲すればなり。嘗みに此の集を繙て見よ、戀に悶ゆるものあり戀に狂へるものあり、戀に哭けるものあり、煩惱の妖雲を拂つて眞如の清月を觀破せんと猛進するあり、父母兄弟の情を歌ふものあり、敬虔の生涯を歌へるものあり、都會の世態に背きて山野の老人小兒の心を歌ふものあり。此等の詩、苟も以て世の同情を得るに足るものあらは、江湖の博雅願はくは一讀を賜へ。

民友社發行

民友社編纂（第四版中）

金貨本位はやわかり

貨幣法は愈〻去々月の官報を以て公布せられたり、而して其實施は僅々四ヶ月の後にあり、左れば吾人は此の短日月間に是非共之を了知せざるべからず、此書之を說明して平易明晰

定價拾錢
郵稅貳錢

世界經濟上の變動

價十二錢
郵稅二錢

本書を初て出版せしは去る明治二十六年四月に有り彼の印度幣制改革の擧ありて銀價大暴落を來たせるより二ヶ月前なりさす、世人は歐米諸國が金貨本位を採りし爲めに產業社會に不景氣を來たせりさ想へり本書は生產分配機關の改良、即ち天然力の應用さ運輸交通の大進步が生產超過を來たし隨て歐米諸國の物價を低落したるを論證せり世人は金貨の欠乏よりして金價騰貴したるものにして銀價は餘り低落せず隨つて金貨國の困難を來たせりさ思へり本書は金貨の需要敢て增加せしにあらずして銀の供給に非常の多きを致し隨て銀價の低落を來したるこさ他の物價下落の理由さ一般にして歐米の困難は干涉保護政策より來るとを論ぜり近頃本書を讀める人、本書を評して曰はく本書の出版は五年前に在りさ雖も究も豫め今日の經濟問題を論ぜる感なくんばあらずさ、然り本書は獨り今日金貨本位の結果に關する問題に參考多きのみならず今日の經濟問題全體の參考さして稗補なくんばあらず是を以て此際特に經濟上に注目せらるゝ讀者に本書を推薦す

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

近刊豫告

將軍之半面

議論文章家としての毛奇伯（モルトケ）

行文雄健、近來の大文字也。讀者翹首せよ。

森有禮

彼れの精神を發揮して餘すなし、教育界諸君の必讀を煩す、

發行所　東京日吉町　民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　吉崎園吉
編輯人　金子佐平

本社電話番號本局七十番
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十年六月十日發行

家庭雜誌第百參號

目錄





家庭雜誌第百參號

(明治三十年六月十日發兌)

社説

社會上に於ける婦人の地位

近頃の我が女學界に於て見出さるゝ著しき現象は、其甚だしく實着になりたること也。

其學ぶ所專ら良妻賢母たるべき準備にありて、一旦人に嫁したらんには如何にして樂しき家庭を作るべき乎、如何にして其子女を敎養すべき乎、抑如何にして一家を整理し、家計を調へ、如何にして婢僕を使ひ、如何にして衣服を製し、如何にして飲食を供し、如何にして父母戚族の間に處すべき乎など、其目的とし其研究する所皆眼前實用實行せらべき事に非ずといふと非ず。從て男女同權を主張する者もあるなく、生涯人に嫁せじと稱説する者もあるとなし、一時世の指目に上りたる女壯士の如き、竟に如何なる邊りに消え失せたるや今は其踪跡さへ尋ぬべからざるにあらずや。

斯く女學一般の傾向が實着穩當にして、空論奇行等に流れざるは、固より喜ぶべきことなりと雖、之と共に女學界の氣骨を消耗し、婦人の高尙なる理想を併せて失墜する如きは則ち亦不可なるのみ。

吾人は近頃の女學が、甚しく實着となり來りたるを見ると同時に、一方には角を矯めて牛を殺さんとし、意氣消沈、家庭以外は全く男子の天地となり、彼等は殆んど全く表面社會に跡を收めんとし、一時喧しく稱道せられたる所謂交際塲裡を司命すべき天職の如き今は委棄せられて顧るものなき姿なるを認む。

然れども婦人の社會上に於ける地位は、もと此くの如く寂寞なるへきにあらざる也。

かの家政整理子女養育をも餘所にして、只管に交際塲

裡を浮かれまはり、所謂家を外の振舞ある如きは、決して好ましきことにあらざるにもせよ、兩性の地位が偏輕偏重するは文明の根本的進捗に甚だしき阻遏を來すのみならず、社會の腐敗は此間に醸もし成さるゝこと一にして足らず。

苟も社會が兩性の集りによりて成さるゝ以上は、たとへ男子の地位に進捗ありとも、女子の地位にして依然たる限りは、社會の進捗に限制せらるべし。特に社會的制裁力の如きは、婦人の輿論と相一致して而して後に其始めて無限の力量を顯はすべきを見る。婦人の地位を以て一國文明の程度を測定すべしとなすもの、固より其故なからざる也。

文明の絶頂は個人發達の頂上にして、國家縮小の極端ならざるべからず、國民にあらゆる權力が國家的能力として政府に集めらるゝは、決して高度の文明を意味するものにあらざる也。たとへば刑罰の主權の如き、固より之を政府の手にあらしめざるべからずとするも、榮譽の主權は政府にあらしめんよりは寧ろ國民にあらしめざるべからず、國家にあらしめんよりは寧ろ社會にあらしめざるべからず。若し嚴密に之を言はゞ男子社會にあらしめんよりは寧ろ婦人社會にあらしめざるべからざる也。

男子が國家の事に主たるに對し、婦人が社會的事業に主たるべきは其當然に要求すべき權利也。特に榮譽の主權者たる如きは、其社會上に於ける恰當の位地也。榮譽は彼等が手に在りて始めて最も有効なる榮譽たるべし。所謂交際場裡を司命すとは此をこれ謂ふにあらずや。

吾人は今の女學が飽くまでも實着なるべきを望むと共に、高尚の理想を以て實着の行をなさんことを望み、今の婦人が飽くまでも家を外の行をなさゞらんことを望むと共に、實着なる志操を以て其當然に占斷すべき

社會上の地位を得、以て日本開化の土臺を更に高きこと一等ならしめんことを望む。所謂女壯士たるは固より不可なる所なれども、婦人の智識をして單に家庭のことに止まらしめんとするは更に不可也。婦人亦固より時事に通ぜざるべからず。政治の得失をも知らざるべからず。社會の變遷をも知らざるべからず。社會に立て相當の地歩を占めざるべからず。

吾人は世が一時の假裝的歐風女學に懲りて、却て女大學的女學の極端に復り、竟に社會上に於ける婦人の地位を并せて沒了せんとするを是認する能はざる也。

科學

食蟲植物

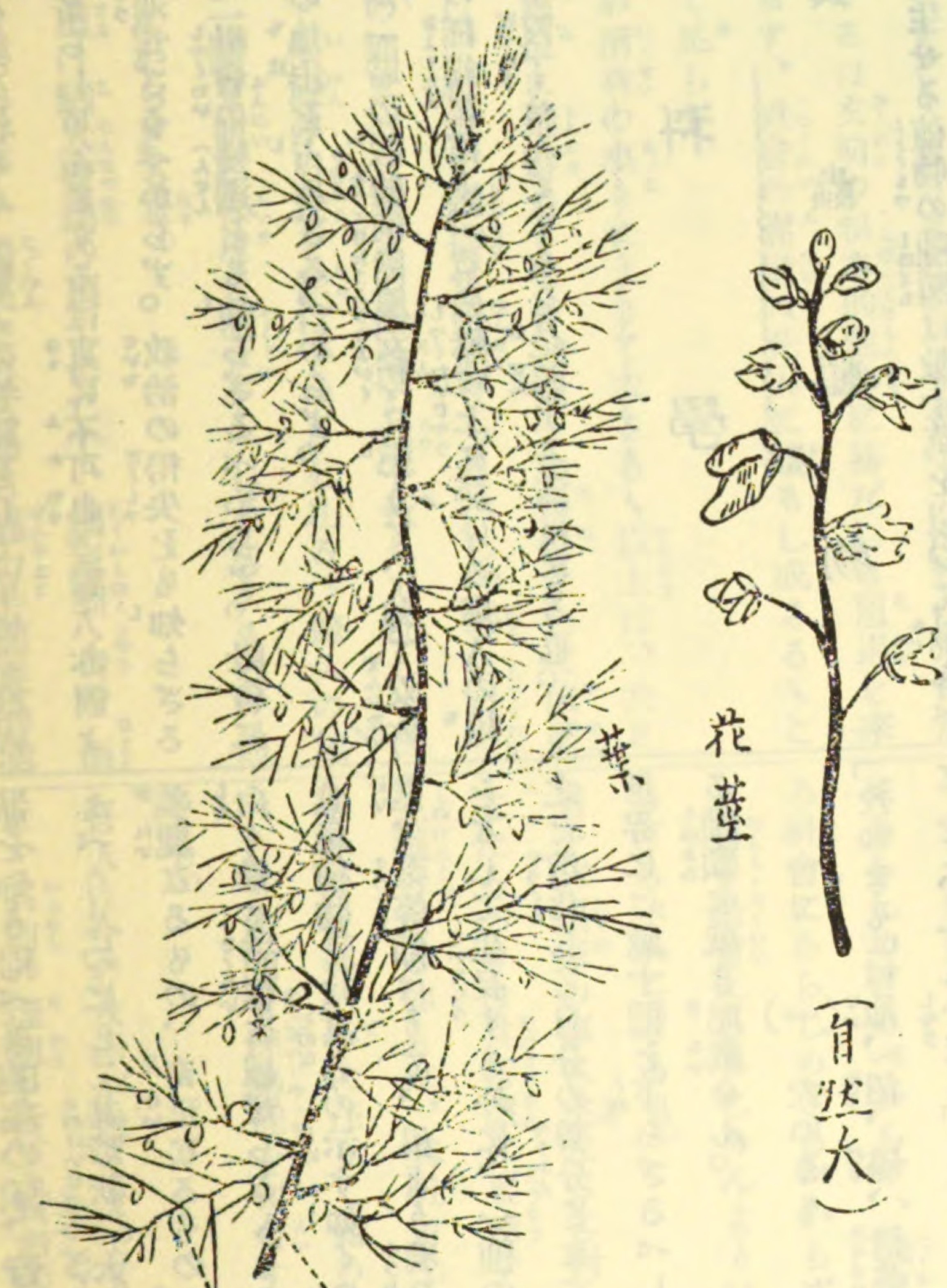
世界中に現生せる植物の種類は數十萬を以つて數ふべし。大なるは鬱蒼たる深林をなす松柏の類より、小なるは濕土岩石の上に緑斑を呈せる蘚苔の類に至り、更に小なるものに至ては顯微鏡の力を借りて始めて其形狀を知り得べき菌藻の類、皆等しく植物なる名稱を與ふべきものにして其形狀、大小、習性千差萬別あり、美麗なるもの、奇形なるもの亦少からず、就中最も面白く最も奇怪に感ぜらるゝものは食蟲植物なるべし。

食蟲植物とは其名の示す如く蟲を食ふ植物にして、根、莖、葉等備はりて、根より養分を吸い葉にて同化作用をなして生長する外に、一種の器官を以て蟲を捕へ、之を消化して自分の養分となすものなり。其種類は全世界には數十種を下らざるべし。次に順を追て其主なる種類に就き記載せん。

(一) たぬきも

「たぬきも」は池、沼、壕、溝等の水中に浮游する小草にして、一見小なる「きんぎよも」の如きも精しく見れば、其甚だ異れるを知るべし。其長さは六七寸乃至一

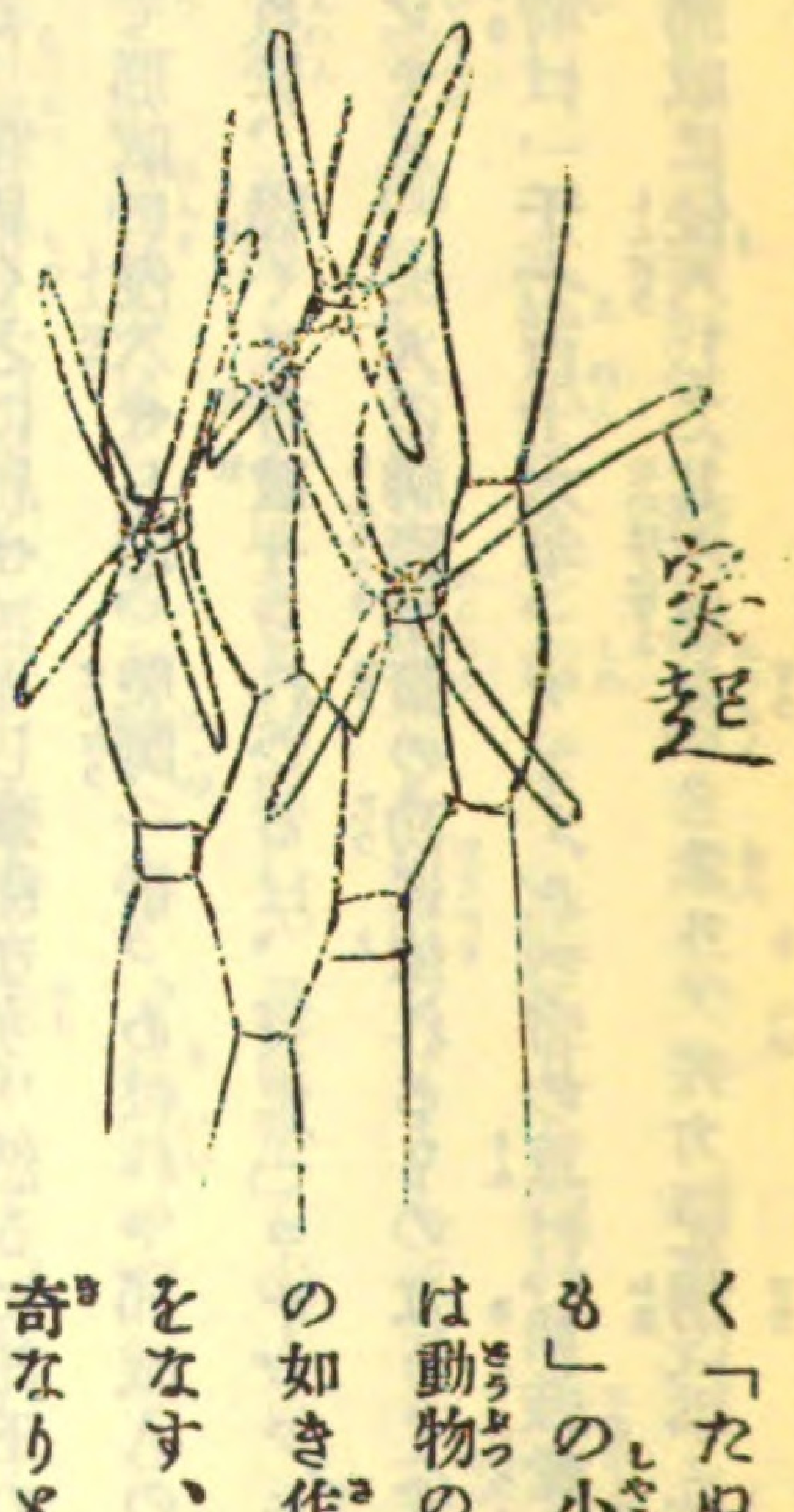
尺余に及び、其分枝せざる中軸は莖にして、根を有せず、軸は莖にして細小なる枝の如きものは葉なり。葉は互生にして多く分岐し、先端に至るほど細小なり。而して又葉間に小なる瘤塊の如きもの丶附着せるを見るべし、之れは小なる卵圓形の嚢にして、一端に細毛を生じ、一見蚤の如し。大さは小なるは蚤大にて大なるものは其數倍に至たる。此小嚢は如何なる作用をなす者なりや。昔の學者は之を浮嚢なりと考へ、此草が水中に浮ぶは、此嚢中に空氣を充すが爲めなりとせり。されど



Utricularia vulgaris, L.
（たぬきも）

こは誤なり、何となれば此嚢を盡く取り去るも草は能く水中に浮ぶとを得るなり。此草の浮ぶは其組織間に空氣を含有するによるが如し。然らば此嚢は何の用をなすやと云へは、これは蟲を食ふ器官にして、之を數倍に郭大せば圖の如く、一端に毛刺を生じ、其所に口あり、口には薄き瓣膜ありて之を閉づ。之れ水中の小蟲に取りては地獄と云ふべきものにして、若し一小蟲ありて何げなく此膜を排して内に入れば、既に墓に入りたると等しく再び逃れ出る能はざるなり。これ此戸は内に向つて開くを得るも外に向て開く事能はざればなり。かくて憐れなる蟲は此中に死し、「たぬきも」の食物となるなり。嚢の内面を顯微鏡にて見れば、右圖に示す如く長多角的細胞の所々より四本宛の突起の懸垂するを見るべし。これ嚢中に殘死を遂げたる小蟲





が腐敗分解したる養分を吸收する器官なり。かくの如く「たぬきも」の小嚢は動物の胃の如き作用をなす、又奇なりと云ふべし。

「たぬきも」は七八月の頃、莖の中部より三四寸乃至七八寸の花莖を生じ、水面上に突出し黄色の花(短絕狀花)を開く。

「たぬきも」は學名をUtricularia vulgaris, L. と呼び、狸藻科(Lentibularieae)に屬す。

「たぬきも」を得んと欲せば餘り濁り居らざる池沼壕溝等へ赴くべし、之を採り來りて鉢又は「コップ」等に入れて、其形狀を見、殊に驚くべき作用をなす小嚢に注

意せば、多少得る所あるべし。可成は蟲鏡を用ひて撿査せられよ、若し顯微鏡を有する人は此草の莖、葉の組織、囊の構造、入口の毛刺、內面の吸收突起等を精驗せらるれば一層の快味あるべし。而して之を其弟妹子女に示して其名を敎へ、其囊の作用を語るは、有益なる家庭敎育の一にして、誠に望ましきことなり。

沼池の中に生じ沼池の中に枯れて、人の顧るものなき此小草に於て、かゝる驚くべき器官を有す。嗚呼自然Natureは如何に美なるものよ、如何に宏大なるものよ。

聖書に自然の美を歌ふて曰く、

汝等野の百合を見よ………ソロモンの榮華の時も其裝ひ此花の一にも及ばざりき、神は今日野に在りて明日火に投げ入れらるゝ花をかく裝はせ給へり………

美談

姫百合

棘野白露

瑞典王チャールス第十二世は、天資剛直にして、思慮周密、機を制し、變を察し、頗る尋常に卓越せり。甞て丁抹、波蘭、及び魯西亞の同盟軍を破り、英姿颯爽、雄風四邊を拂ふ彼の有名なるペートル大帝と拮抗して、容易く之に屈せざりし豪傑なり。然るに此王の甞て那威に侵入せし時、戰鬪一番、あはれや那威人のために、脆くも打破せられたるは、實に「コルビチエルンチス」夫人の神籌奇策の功に依れるものなりとす。時は一千七百十六年、チャールス帝の軍は、旗鼓堂々、那威に侵入して其本據を「クリステアナ」に搆へ、一分隊に大佐ローベン氏を將とし、騎兵八百を率ゐて、コ

ンスベルグ城を粉粋せんとし、「ハレスツウッド」の險路を越えて、「ノルデンハウグ」に野營を張りぬ。戰雲暗く腥風地を捲いて來る。而して那威軍は、敵軍の動靜を探らんがために、其近傍に陣したれども、未だ瑞典軍の「ノルデンハウグ」に在るを知らざりしが、偶〻大佐ローベン氏が、一牧師の宅に宿りて、那威軍は、我陣營に近き三英里以內の地に在るを探知し、曉鴉梢上に騷がず、金鳥山巓に舞はざるにさきだち、其軍を襲うて一撃のもと、コンスベルグ城を粉碎せんと議せり。この時に方り、からうじて此謀議を漏れ聞き、一片愛國の衷情禁する能はず、奮然意を決して護國の策を講じたるものは、實に牧師の妻「コルビナエルンス」夫人なりとす。

夫人この議をもれ聞きて、直に之を那威軍に報じ、以て其危難を救はんとを欲したれども、もし此計にして一たび敵將の悟る所とならんか、身は敵刃の一閃に斃れて、志望空しきのみならず、國家の安危得て知るべからず。若かず、徐に良策を案じ、表に瑞典の軍を款待し、一意餘念なきを示して、陰に耳を傾けて敵軍の計略を詳にし、以て確實なる報道をなさんにはと決意專念、又深く慮る所あるが如し。是に於て夫人は、饗應その品具の足らざるを整へんと、危計いつはりてかく口實を設け、窃に一僕を本軍に走らせて、詳しく敵軍の動靜を報道せしめたりき。

神ならぬ瑞典の大佐ローベン氏は、斯くとも知らざりしかば、その兵の一部をスタチンに送りて、その準備をなさしめんとし、路を夫人に問ひぬ。よりて夫人は之を欺き、他路につきて赴かしむ。かつ大佐の馬を詐り隱して、以て其機を誤らしめ、大に敵軍の勇氣を阻喪せしめたり。

窮して策あり、危計よく敵軍の勇氣を沮喪せしめたりしが、これより如何にしてかよく全軍を斃しつくさん

と、苦心焦慮、遂に一計を案出するに至れり。そは他事にてはあらざりき。夫人の爲さんと思へるは、盛に烽火を起し、那威軍をして、これを合圖となし、直に敵軍を進擊せしめんとするにてありき。是に於て夫人は、兵卒をして火を焚き、煖をとらしめんことを大佐に請ひ、何心なき躰にて、烈しく其火勢を高めたりき。那威軍は、預め夫人の報道に接し、其合圖を知り得たるを以て、直に出軍して牧師の宅に向ひたるに、瑞典の軍その意外なるに驚き、周章狼狽、未だ戰ふに及ばずして敗走し、大佐ローベンソ氏の如きは、あはれや生擒の身とはなりぬ。是に於て那威軍は其勝利を祝し、「コルビチエルンチス」夫人の饗應を受けて、一夜を其地に送りぬ。然れども戰鬪いまだ全たく終りたるに非ず、瑞典の敗卒再び集合して以爲らく、那威軍は我が殘卒よりも猶少し。若かず、曉を待ちて之を進擊せんにはと、然れども猶敵軍の實況を知らざるを以て、斥候を放つて之を探らしめたり。此朝「コルビチエルンチス」夫人は、戰場を視察せんことを欲し、一婦人を從ひて赴きたるに、偶ゝ斥候と道に會せり。怨恨深く胸をきざんで、昨夢未ださめざる瑞典軍なれば、齒なり肉吹ゆる斥候兵は、直に馬を驅せて夫人に向ひ、その胸に銃を擬して烈しく之に問うて曰く、那威の兵今何處に在りや、かつ其兵數幾許ぞ、つゝまず語れ、もし言語を左右し、其の實を答へずんば、直に汝を銃殺せんと脅迫甚だ劇し。同行の婦人は、その勢に驚きて爲に昏倒せり。然れども「コルビチエルンチス」夫人は、猶神色自若として反問して曰く、汝が王、果して老婦を殺せと命じたるかと、斥候耻ぢて銃をひく。然れども必ず確答を得んとを主張せり。是に於て夫人は徐に答へて曰く、その兵數の如きは、君等速に之を發見すべし、我兵現に此教會の後にありて、將に君等を追擊せんとす。われ未だ嘗つてその兵數を算へさるが故

に、いま其詳細を語る能はず、然れども妾の知る所を以てすれば、その狀恰も集中の群蟻の如しと、斥候はこれを聞きて直に之を本軍に報じければ、全軍色を失ひ、列を亂して逃走せり。よりて那威軍は勝勢に乘じて之を追擊し、忽ち之を國外に放逐したりと云ふ。あはれ此一戰、チヤールス第十二世が、終に其志を得る能はずして、大軍よく一婦人の術中に陷りし腑甲斐なさよと、史籍その跡を滅せず、永く世のもの笑ひとなりしに至れるは、實に「コルビチエルンチス」夫人の功によれるものと云ふべし。遠く男子の及ばざる所、又偉なる哉。

文藝

田舎娘の旅（上）

曳馬野萩子

空を仰ぎて羨みし、鳥の翼も、いかでかと思はるゝ、滊車といふものゝある今の世より、昔の旅のことを思ひ出づれば、實にこそあさましくもまたをかしけれ。今より八年ばかりの昔なりけんいまだ東海道の滊車の、國府津までなりしころ、おのれら同じ志なる三人に、一人の從者めく男、さしそへられて、物學びせよとて、都におくられぬ。その男は、かつて見しことも、なかりければ、人となりも知られねど、年は四十を越えて、いとまめやかなる田舎人にてあめれば、たのもしき心地す。明日とての夕つかた、濱松なる花屋といふ宿屋に打ち集ひぬ。やどの主人の、すゝめにて、靜

岡まで、驛ごとの入力車の、切符を買ひつ。こは車夫の増錢など、うるさく乞はんを避けんに、便りよしといへばなり。こゝより靜岡まで十の驛あれば、四人の料にとて四十枚をかひたり。つとめて、空のけしき、晴れやらねど、今はとて出で立つ。見付の驛にて、濱松の車を下りて、四枚の切符を與へたるに、それ取りて、また増錢を乞へり。さればよ、規則に背くならずやといへば、さらば、酒手たまへなど、とかくいふが、いとうるさければ、乞ふがまゝに與へつ。さて、こゝにて、次の袋井驛までの車を、雇はんとするに、同じく増錢の約束なくてはとて、動かず。せんかたなくて、また負けてけり。掛川の驛に來るに、こゝはた、切符のみにては、え通られず。かくて日坂もすぎ、金谷につきし時は、正午近かりければ、よきやど撰びて、晝食まつ。一時をすぎんとするに、もてこず。しきりに促したれば、辛じてもてきつ。急ぎたうべんとするに、飯はまだ半は米なるに、熱くて、口に入るべくもあらず。添へたる物は、數ありけれど、味いみじうて口に叶はず。たゞ呆れてそのまゝになしおき、いざ出で立たん、車そなへよといふに、車夫と主人と、心あはせて、此金谷の驛のみは、二倍の増錢なくては、車は、たえて行かじといふ。そは規則にそむけるならずやといへども、聽かず。女なりとて、むげに、あなどることの、腹たゝしさに、供なる男に、幸ひ隣りなる警察署に行きてよと、おこせど、つゆ恐れぬさまなりければ、まことにやる。心ゆく心地して、見ゐたるに、例の車夫ども、のゝじり騒ぎて、あれ見よ、警察署に行くとて、電信局に行きて、ぬかづきをれり。文字を知らぬも程こそあれと、わざ笑ふよ、いとほしくもまた、かたはらいたくて、いかならんと、心ときめきせられて、まつほどに、一人の巡査ゐてきつれば、少し心つよくなりて、奥にてきくに、旅人に、わづらひか

くるはなぞ、とて主人をせむれば、ぬかづきて、顔をもえあげず、また切符のみにて、とくゆけ、一文たりとも、増錢なとりそ、とく／＼と、せめたてらるれば、車夫も皆かしこみぬ。さはとて、まねぐ、巡査に謝して、うち乗りて出で立つ、大井川の橋も、心地よくわたりつ。

開けたる御代のめぐみは大井川、
　かちわたりせし昔をぞ思ふ。

空もやゝ曇りがちなれば、いそぎて島田、藤枝、岡部もことなくてすぎぬ。夕つかた、丸子のあるやどにきて、とく靜岡まで、車そなへてよといふに、はや時もおそければ、車は皆出でゝ、殘れるものなしといふ。こゝにやどらせんとて、主人のたばかりごとなるべし、今日はいかにしても、靜岡まで行かでは、明日の旅にたよりあしければ、いたく困じゐたるに、かなたに車の二ッばかり見ゆれば、喜びて、とく／＼とよべば、馳せ來ぬ。猶二ツをといふに、いづれよりか、ゐてきたり。主人、車夫らと謀りて、れいの二倍の賃ならでは、え行かずといふ。いとにくけれど、とかく時うつりなば、夜道心もとなからん、雨はたおちぬべき空なれば、乞ふがまゝにせん、とく走れといへば、車夫も主人も打ち笑む心のうち思ひやられたり。夕ぐれの空暗うなりて、からすのおくれたるも見えず。野寺の鐘の音いとあはれにひゞけば、さすがに故郷の空ぞかへり見らるゝ。森に入り、畠に出でゝ、車の馳するほどに、空はいよ／＼暗うなりて、手にこぼるゝ露二ッ三ッ、涙か雨か、ほどもなく、木の葉うつおと、紛るゝべくもあらず。はや雨こそ來つれとて、いよ／＼馳する車の音に、劣らざらんと降りきそう雨、いとすさまじ。戰場を行く心地して、おそろしくさへなりて、夢うつゝともわかず、念じつゝ行く程に、かなたに燈火のかげ見えはじむるは、靜岡にやと、思ひつゝ近づ

くまにま、いよ〳〵多く見ゆれば、さなりけりと、飛びたゝんばかりにうれし。市に入り、しばしはせて、つひに大萬といふ宿屋につきぬ。雨はいよ〳〵ふりしきれど、今は心にもかけず。ありしことども打語らひ笑ひて、たのしさいふばかりなし。供なる人の、近き室に、あやしげなる男のをれば、心したまへといふ。おそろしうなりて、いかにしてねんなど打ちわぶる。友の一人、わが行李のうちには、亡き母がかたみの衣のあれば、こを盗まれたらんには、此世にをらん心地もせずといふ。ひとりの友、わが行李のうちには、父の賜はりたる、いと貴とき本のあれば、こを失はんには、父に何の面目かあらんといふ。おのれも、わが行李のうちには、母の賜はりたる、いみじう味よき菓子のあれば、こを取られんには、旅のうさもいかでか、はらさんとてなげくを、供なる人いたく笑ふ。さればおの〳〵、行李を枕にして、いねたらんにはと、一人のいへば、それよけんとて、各〻小さき行李に蒲團うちかけて、枕にしていねたれば、昔ヤコブといふ人が、石の枕せしときゝしも、かくやありけんなど、思ひやらるゝまで、苦しくていもねられぬに、まして雨さへ、いたくふりしきれば、明日も、やまずば、いかゞはせんと、心細くて、いよ〳〵ねられず。夜をあかしてことなかりしを喜び、かたみに、かたき枕のねられざりしを、かこたぬものなし。まづ空をながむるに、よべの雨、名殘なく晴れたり。うれしさ何にたとへん。今日は箱根のふもとなる、三島の驛までとちぎりて、馬車にて出で立つ。おのれらが乘れると、打ちならびて出でたつ馬車あり。紳士なるべし、その妻と、一人の子とを、つれて乘れり。その馬は、いと强げにて、とく馳するにぞ、かげも見えずなりにけり。おのれらが乘れるは、やせつるなりければ、いとくやしくて、友の一人、馬丁にむかひて、次の驛につきなば、馬とり

かへて、かの馬車に、追ひつけよといへば、馬丁、顔をそむけて、あなかしこ、わが馬よ、とく進めよや、進まずば、姉御らに、嫌はるゝぞやといひて、打ち笑ふ顔つき、あまりのおかしさに、いかることもならで、たゞ心にのみ、むづかりたり。

若葉の露

茂川千種子

海に山に道ある御代に、生れあひぬるぞ幸おほかる、中にしも汽車てふものゝ出來しより、翅なき身も心のまゝに千里のはてにも、たやすく行うる事の嬉しさよ、此頃つれ〴〵なるそゞろ心におほし立つる事ありて、程近き三崎町なる停車場に至れば、折よくて八王子行に乘込ぬ、今や車はめぐり初しとおもひあへず、牛込市ヶ谷もとみに經て躑躅に名の匂ひてし大久保も、よそにみなして中野を過ぎ荻久保より、境に出づ

此處は誠に桑の木茂りあひぬ越來し道の右に左りに、ゆたかなる田の面畑の面眺むれば何事も、思ふひまなき心地してなん、されど國分寺にて車をおり小金井の里に入て見れば、花にとひし梢もつかの間に青葉とかはりしありさま、またをかし、

世の人も春のみもひそ夏衣
みどりにかをる木々にならひて

花めでし木々の梢はさらに又
若葉の露の玉ぞかをれる

花にとひし頃は小金井橋のほとりなど、わきて人しげう、おぼえしも、あはれ物淋しき迄に人影も見えず、上津瀨遠き一筋の流れには、堤の若葉の影なつかしう色そゆれば、下りたゝまくおもほへしが、水は底深きにやみぬ、されどうすき袂のうら涼しくあふぎ見れば、ゆかしき梢のしら露は夕日の影にかゞやきて、まことの玉の風にちるかとあやまたるゝを、此川の末くむ人

やいかならんと忍ばれて、

風にかほる若葉の露のちりてより
名や流れけん玉川の水

小說

山むぐら

太田玉茗

(一)

『兄樣〱どこへ行くの、妾もつれてつて頂戴よ、待つてゝおくれ。』と野を横切つて、叫むで後から追ひかけてくるのは、年齡八歲か九歲ばかりの、可愛い一人の小娘であつて、頰は豐かに眼は大きく、髮はふさ〱と風になびいて、眞白な襟もとに亂れてゐる。

『みいちやん〱疾くおいで。』と後ろを振向いて立止つて、優しい言葉で對へたのは、即ち小娘の兄であつて、十二ぐらゐの賢しげな少年。齡にはませて大人びてゐるが、目にも口にも愛嬌があつて、又どことなく凛としてゐる。しかし何故か今日は沈むで、例の如くは浮立つて居らぬ。

妹は喘ひで呼吸をきらして、漸く兄に追ひついたが、眼瞼をあかめて涙ぐむで、

『兄樣お前どこへ行くの、何だつて妾に默つて來たの、默つてくるなんて酷いぢやないか。』と怨めしさうに見つめたので、

『一緒に來やうと思つたんだけれど、みいちやんはゐなかつたものだから。』と兄は妹に辨解する。妹はいツかな聞き入れずして、

『いゝえ妾はゐたんだわ、お裏で遊むでゐたんだから、みいちやんと呼むでおくれゝば可いのに、何だつて默つて來てしまつたの。』

其の權幕のおそろしいので、兄は妹を宥めむとして、

『さうかいお裏に居つたのかい、兄様はゐないと思つたから、それで一人で來ちまつたの、堪忍しておくれ、ね、みいちやん。』と其の顔をながめる。みいちやんの心も和らいだか、

『これから默つて來ちやあ可厭よ。』とあまへる如く兄に語つて、

『どこへ行くの。』と行先を尋ねる。

『どこへつてお寺へ。』『何に。』

『お墓まゐりに。』『お母様の。』『あゝお母様の。』『お母様はどうしたらうね。』『お母様はお墓に眠つてゐるの。』『何だつてお墓に寢てゐるんだらう。お母様は本統に酷いわ、此間なんか寢床の側で、お母様お母様と呼むだんだけれど、起きもしないし返事もしないで、默つていつまでも寢てたんだもの。だから皆人が箱へ入れて、お墓へ埋めてしまつたんだわ。けふはお母様を呼むで見やう、兄様返事するだらうね。』

『返事はしないよ、お母様は死むでしまつたんだから。』

『死ぬつて何。』『死ぬつて眠つてしまつたんだから、いくら呼むだつて返事もしないし、いつまで經つたつて目もさめない。みいちやんお前は知るまいがね、家のお父様もお母様のやうに、疾くに死むでしまつたんだから、お父様もお母様も既う無いのだ、だからみいちやんおとなしくおしよ。』妹は何だか心細いやうな、悲しいやうな感を起して、

『兄様妾はおとなしくするから、又お母様のやうに死むぢやあ可厭よ。兄様はいつまでも死なゝいでね、今までのやうに遊むでおくれよ。』

『何故。』

『だけどみいちやん、もう一緒には遊べないの。』

『なぜつて兄様は明日からね、遠いところへ年季に行くの。』

『どうして兄樣は行つちまうの、行かないでおくれよ、妾は一人になつちまうからさあ。』

『みいちやんは一人になりやしないよ、お前も餘所へもらはれて行くから。』

『妾はいや、もらはれて行くのは可厭だ。』

『可厭だつて何だつて行かなくつちやならないよ、こゝには家が無いのだから、居たいつて居る事ができないぢやないか。』

『いゝえあるわ、あすこに見えるのが家ぢやないかね。』

妹は一軒のあばら屋を指して、

『そら兄樣とお母樣と、それから妾と三人して、一緒におまんまも食べたぢやないかね、一緒に寢たり起きたりして、毎日遊むでゐたぢやないかね。』

『それだつてあれは借りたんだから、うちの物ぢやあないんだよ、餘所の伯父樣に返しちまつたの。始終お母樣がさう言つたが、もとお父樣のゐた時分は、錢もあつたし家もあつて、立派な着物もあつたんだけれど、人に取られたり損したりして、すつかり無くなつたものだからね、お前も聞いて知つてるだらうが、皆人が家を貧乏人だ、店借人だと馬鹿にして、誰も一緒に遊むでくれない、だから兄樣も遊ばないの。お前と一緒に遊むでゐるから、そんな奴らと遊ばないでも、何にも困りやあしないけれど、口惜しいからなあ、年季に行つて商賈を覺えて、大きくなつたら錢を留めて、立派な家を拵へる所存だ、而うして皆人に威張つてやらあ。お前も餘所へ貰はれて行つたら、伯父樣や伯母樣の言ふことを聞いて、何でもおとなしくしなくつちや可けない。兄樣は立派な家を拵へて、いまにお前を呼ぶからね、大きくなるのを待つておいで。可いかい、お前も明日は貰はれて行くし、兄樣も明日は年季に行く。』

妹はやう〳〵納得して、

『それぢやあ妾も貰はれて行くから、兄様も年季においでなね、而うして立派な家が出來たら、屹度妾を呼むでおくれよ。』

『呼ぶとも〳〵屹度呼ぶから、何でもおとなしくしておいでよ。』

『あい。』と妹は對へながら、路傍の菫を摘み摘みして、片手に花の一束を握つた。

『兄様可愛い花なことね。あのお母様が寢てゐた時分に、此花摘むであげたらばね、奇麗な花だつてお笑ひなの。けふも持つてつてあげやうや。屹度嬉しいつて喜ぶだらうね。』

『あゝお母様は喜ぶよ。』

兄と妹は睦ましげに語つて、手を携へて墓場へ行く。

談叢

栗鼠の古巣

勝間禪夢

ある險阻な山の麓にこんもりと生ひ立つ一株の樹がある、此木の枝を己が住家と定めて年久しく暮して居た一匹の栗鼠、此頃俄に慢心増長して此の寓居に不足を感じ、何處ぞ善い塲所は有るまいかと東西又南北と眺め、枝の間を駛けめぐつた末、臥戸の穴に這入つて斯樣な事を獨言にいつて居た。

私程詰らない者は恐く世界に二人とあるまい、年百年中同處に許棲んで居て、日暮れては同じ穴に休み、日出でゝは同枝を走り、行くも歸るも同じ木の上で、胡桃嘗むるも櫟子食ふも毎日變らない此の木の間——眞實埋木の身だ、此儘こゝに便々として

居たなら、何時まあ花咲く春に逢へやう、それは到底逢へないことで唯だ井戸の蛙の譏を招くのみだ、羨ましはあの鳥、私の樣に此木に巣を持つ身だが、翼といふ利器のある爲め、天にも登り地にも下る、そして何處でも思ふまゝに飛び歩く、昨日までは直き隣枝に居た杜鵑も今朝は既や春を慕ふて南方の暖地へ旅立つた、――彼の小さな鶯までも殘るは此木に私許だ、私も彼の樣に飛んで見たいと思ふけれど、さりとて無い羽根は振られない……だから鳥の眞似は到底出來ないが、幸私には健强な足が然も四本あるから、大地を走つては、野で御坐れ山で御坐れ疾風の如しだ、では早速出掛やうが先づ何處に行くとしやう、常々梢から眺めるあの嶺は朝日の出る所ではあるし、五彩の雲のきらびやかに棚引くところだから、彼處は善いに相異ない、登つて見て若しも好ましく無かつたら下りて來るまでのこと、兎も角嶺へ登るのは面白い、善は急げだ明日出立すると極めやう。

其夜一夜の栗鼠の心は早や遠い旅路に走つて臥床の内を離れて居るからまんぢりとも眠ることが出來なかつた、梢の方に東雲告ぐる鳥の聲聞くや遲しと跳ね起きて、旅の仕度も倉卒に整へ終つて唯つた一個の旅行季引提げたまゝ木の根に下り、逸りに逸る心は抑へ切れぬもの――住みなれた古巣も後に見ないで先方へ先方へと只管急いだ程に、日も未だ高く登らない頃、既や草茫々の原も扱けて只有木蔭に着いたが急に減腹さを覺えたので、行李から辨當を取出し、こゝで始て朝餉を濟ました、それから再び進み出すと直ぐに、恐ろしく屹立つた坂の下に來た、此坂はさまで高くはないが、其峻險さと言つたら恰で屛風の樣で前足の短い兎でさへ容易には登り得られまいと思ふ程だから、流石强情の栗鼠も此有樣には少しく避易したが、此式の坂

何の甕と奮勉驅け上がつて見たものゝ、何しろ急の阪だからどうにもかうにも足腰が疲れて、五歩で止り三歩で休むといふ調子で、呼吸も惱しくなれば汗も浸んで、やう〳〵のこと坂の上に登り着いた、だが此坂一に非常の時間を潰したので、まづ一休息と疲れた躰を地面に投出し、中食を喫べた時は既に午時も餘程過ぎて居た。

この時栗鼠は越えて來た後の方を眺めて、何とも言へない善い景色に稍暫時は茫然として居たが、己が住で居た土地が丁度足の下に成つて居るので、登來た場所の高いにも驚けば、又古巢の木の低いにも呆れた、それから振向いて登るべき前の方を仰ぎ見ると、山の巓は丁度頭の上に屹立つて居て雲衝く許の高さだ、旅の前途は頗る遠い、そして漸々險しく成る、だから栗鼠も弱つて思はず青い氣息も出たが、再び氣を引立てゝ攀ち始めた、だが前の如く早くは歩けない、上の方に進むに從ひ道は漸々踏惡くゝなり、氣候は次第に寒く成つて來た、栗鼠は我慢に我慢して二時間程も歩いたが、既や身躰も精身も疲れ果て、一歩も前に進み出せない、で、眞綿の樣にグンニャリと倒れて仕舞つた、そこで前を眺めると山の巓は低いやうでも高い近いやうでも遠いもの、まだ〳〵餘程の道程である、それに日も暮れかゝつて、空合さへ不可く成て來たから、何となく心細くも成れば覺束なくもなつて、到底今日は駄目だから何處ぞ善い場所に一泊しやうと思ひ、其方此方を見廻して居ると、間も無く風は吹く雨は降る、雪も混つて雰ふ、それは〳〵恐しい雪吹となつて仕舞たので、栗鼠は幾度も吹飛ばされて右に轉げ左に倒れ、進退こゝに窮つて前に行くことも後に戻ることも出來ない、そこで據所なく平蜘蛛の樣に地面にかぢりついて、今は唯だ嵐の止むを待つのみだ、――其有樣は丁度何かに謝罪るやうな風だ、――暫くして栗鼠は

偶と四五間先に岩の洞穴を見つけ出し、慌てゝその中に駛け込んだ、――この洞穴は堅固で奥深いから避難の場所には持つて來いだ、――そこで栗鼠もほつと氣息を吐いて安心したから、先づ饑を凌がうと思ふと何時の間にか行李は落として仕舞て居る、チエー殘念といひ樣そこに寢ころんで見たが、岩の內は身を刻むやうな寒さで、ヒユウ／＼冷たい風が吹込むから碌々瞼も合されないで夜を明かして仕舞つた。

其の翌朝は雨も風も止んで、山の巓からは長閑かの光を帶びた朝日登つて、朗かに晴れた空を栗鼠に見せたから、栗鼠は喜び勇んで挫けた心を奮起し、凍と饑にて動けない躰を辛くも持たげて、浪々しながら徘徊まわつて、頂上へ登る道を漸とのことで搜し出し、それに侍つて歩き出した、すると程無く飢渇に迫つた一羽の鳶が此の狀態を見付けて、得たり賢し仕合よしと空より飛んで來て、鋭い爪に引掛け何處とも知れず掠つて行つた、栗鼠も始の內は必死となつて鳶と空中で揉み合つたが、弱者の肉は强者の餌食、散々の目に逢はされて手出しも出來ず、今は早や鳶の爲すまゝに運命を任して仕舞つた、そこで鳶は己が巢の方さして眞一文字に飛び出した、すると道の中途で不意に鷲に遭遇した、南無三見付られては一大事と後に引返へしたが、もうその時は遲い、鷲は此方を向いて鳶ぐるみせしめやうと的つて居る、間も無く搏ち合ひ始まつて双方火花ではない毛花を時ならぬ空に散らして戰つたが、强い者には强い上手のある道理、すんでのことに鳶の命も危く見えたが、鳶はもう敵はぬと折角の好餌も空に投棄てゝ顧る暇なく一散に逃げ出して仕舞つた。

これが爲め栗鼠は高い空から眞倒に落とされたが、幸葉の繁つた大木の枝に支へられたから、危い命を辛くもこゝに繫ぎ止むることが出來た、だが一時は氣

絶しし全く感覺を失つて居た、間も無く呼吸吹返へして氣がついて四方を見廻すと、其處は故鄕に近い森の中で、古巢の木は一町許隔たつた南の方に在つたから、栗鼠は足の遣場も無い程に喜び、急いで其處を立退き、己が古巢に歸つて、床しさうに木の葉や板の間を眺めて淚を流しながら、

住み馴れた故里程善い處は恐く此世にあるまい、大望を達することが出來ずに仕舞つたのは、實に殘念である、遺憾である、が、併しそれは私の力に到底及ばないことゝ諦めてもう〳〵悔むまい、そしてこの古里に落着いて一生を暮さう、これからはもう此木に不足もいふまい、不平も抱くまい、氣樂に面白く暮すことが出來るは眞實此處許だから…………あゝ隨分危險い目にも逢へば苦しい思も爲た、本統に旅は憂いものつらいもの、思へば栗鼠の世路も仲々難しいものだなあ！。

と言つたとさ。

家政

甘藷の用法

一平民

十字街頭勞働者は之によりて空腹を充たし下宿樓上寒措大は之を以てカステラに代ゆ、まことに平民的食料として恰好なるは甘藷に如くものあらじ豈に特り備荒應饉のみといはんや。

按するに、甘藷は元と呂宋及福州地方に產し後琉球に傳ふ、寶永年間薩摩國指宿郡山川鄕に利右衛門なる者あり琉球に航し其種を得て還る、是より遂に四方に播殖し農家常食の一となるに及び所謂薩摩芋の名あるに至れりしなり、故に薩摩に於ては今尙之を唐芋と呼べり、聞く大隅の屬島は地味槪ね瘠确にして米麥に宜し

からず之を以て島民家々多くは甘藷を以て常食となし偶々米飯を食ましむるも反て之を歡はざるの色ありと、蓋し口腹に慣れざるの致すところならんも亦代用として妨げなきの證となすに足らん。

凡そ物、用うることの繁ければ隨て種々雜多の應用を發明するものなり、薩摩地方の甘藷に於けるか如きは即ち是なり、予は今茲に同地方に行はるゝ用法を記して大方の諸君に示さんと欲す。

一葛粉

甘藷を以て葛粉に代用する製法は先づ槌を以て碎くか又は山葵卸の類にて細末に爲して水に浸し置き其含むところの白汁を全く除去せし粕は絞り上げ水底に殘る白汁は濕氣を去るため屢々清水を注ぎ晒し上くれば直ちに葛粉に代用すべきものとなる

一寒晒

極寒の候甘藷を小片となし凡十日程（之を浸すの日數愈々多ければ愈々溫氣を去り白色を現はす）水に漬け然る後引揚げて日光に乾かし細末と爲すときは恰も糯米を以て製したる寒晒に類す且蟲害なくして永久の保存に堪ゆ

一酢

酢を製するには甘藷を小片となして日に乾かし此小片一升に麥糀五合を混和しこれに水一升を加へ半煮と爲し之を冷やして壺に入れ手を以て能く混淆したる後紙にて目張し雨の當らざる日蔭に置き其上に銅錢壹個を載せ置き其錢に綠青を帶ぶる時を成熟の度とす若し幾日を經るも綠青を帶びざれば酢の成らざる證なり蓋し混淆法の備はらざるに因らん此塲合には更に甘藷二三個を燒き壺中に純良なる酢を少しく撒布し後ち右に陳ふる如くせば必ず良酢を得るなり此芋酢たる其色清水の如くにして毫も臭氣なく其味最も佳にして酸氣頗る烈し元來此製法は同國岡兒ケ村の農岡本某の妻をこなる者の發明に係り其近村以

前は專ら麥を以て製する習慣なりしに此發明ありしより全く麥酢を廢せりといふ

一醤油

此製法は甘藷を方二三分計に切り一日程日光に晒し充分水氣を去るの後之を鍋にて熬り少しく焦色を帶びたるとき之を取揚げ小麥又は大麥を加へ麹に製す而して水鹽の加減等は大豆製に異なるなし但し麥を加ふるときに其熬り揚げたる甘藷に水を注ぎ少しく蒸氣を含ましめて混和す就中寒製の如きは大豆製に劣らずと雖只滓多しと云へり

一味噌

味噌の製法たるや只甘藷を大豆に代用するのみにて他に異なることなけれども鹽は少しく多量に加ふるを好しとす又一時に數樽の量を製するときは酸味を帶ぶるの憂あり宜しく旬餘の食料に充つる丈に止むべし

一飴

飴を製せんには甘藷を蒸し之を舂きて桶に移し麥芽を加へ（凡一貫目に四勺計を混入す）暫時蓋を覆ひ置き後三四回混動するときは恰も水を添へたるものゝ如く變化す此時袋に入れ絞り其垂れ汁を鍋にて煉り詰め成るべく長く火に掛けるを好しとす

一芋飯

を炊くの法は仕掛けたる飯米の上に甘藷を厚さ七八分位に切りて入れ置けば飯と同時に蒸さるゝなり斯くして出來たる飯は甚だ甘味を帶ぶ但し少々水加減を少くすべし

此他尚ほ粉米に小豆砂糖を和し煉羹を製し或は料理に使用する等其用法枚擧に遑あらされどもそは他日更に記述するの期あらん、

以上記する所何れも簡易の方法なれば、一家經理の任にある内助の方々の折節に試用せらるゝこともあらん

には亦一興なるべし

若し虎列刺病流行せば

蒲　公　英

追々暑氣に向ひて種々なる流行病の襲ひ來る時節となり凡て家婦たる者は一家の健康を保護し病魔の入り込まぬ樣注意すべき責任あれば其豫防法を心得居ることそ肝要なれ殊に虎烈刺の如きは一度發生するや忽ち猖獗を極め見る間に幾多の人命を滅ぼし至て恐るべき病なれば今聊か其豫法を記し幷せて若し不幸にして一朝此災に罹りし時の手當の法をも記るさん

第一家内及其周圍近邊を全く清潔ならしむべし暑氣に向ふ頃に至らば必ず一度家の大掃除をなし一點の塵不潔物も殘り居らぬ樣隅々まで拂ふべし又家の周圍庭園等にて枯れ朽ちたる木片木葉等は悉く掻き集めて火に燒き盡すべし或る黴菌學者の說によれば古き板塀等は最も多く病毒の潜伏し居る場所なりと云へば能く洗ひ潔めて塗りかへること肝要なり田舍家にては家禽小屋家畜小屋の掃除をなし壁を塗りかへ彼の推し積れる塵芥溜の如きは取りくづして火に燒き燃えざる部分は地中に埋沒すべし又井戸換をなし天水桶溜水等を灑注し捨て溝渠の掃除をなし以て汚水汚物の溜り居らぬ樣にすべし彼の人口調密なる都會にて傳染病流行の際は地方に逃げ行かば最も安全なりと思考する人も多けれど地方は都會の如く清潔法衞生法等に注意行屆かぬものなれば却て病毒の製造場となりて危險なることあり然らば地方に住居する主婦等は殊更に衞生法を研究し又是を實行して先づ其近隣の人々に好模範を示し次第に其一村迄にも及ぼし其村をして淸潔健康なる場所とならしめ以て都會に傳染病流行の際には市民の安全なる避所とならしむる樣盡力すべきなり

盥盤桶等の如き木造の器は日々洗ひ潔めて數時間も日

光に曝らし用ゐざる時は可成常に乾かしおくべし彼の種々狀々癈物を捨る塵芥溜の如きは夏の暑き日光を受るや忽ち腐敗して近傍の空氣を不潔ならしめ恐るべき病氣の源因となること間々あれば塵芥溜には蓋あるものを用ゐ其中の癈物は可成度々取り去らしめて溜めおかぬ樣にし又時々は其內を洗ふことも肝要なり食料品を入れ置く鼠入らず戸棚等は每日拭き潔むることを怠るべからず又常に石炭を求め置きて下水塵芥溜其他不潔の憂ある場所には斷へず散布すべし

次に主婦の注意すべきものは飮食物なり飮水は必ず漉したるものか或は一度沸騰したるものなるべし田舍の水は都會の水に比すれば冷やかにして且つ淸ければ生水を其儘用ふるも差支なしと考ふる者もあれど這は謬にて田舍の井或は桶水の周圍には大抵草木或は野菜類の繁茂し居りて稍もすれば其枯葉腐敗物の落ち入り居るものなれば却て危險多し猶水を沸騰せしむることに付て一言云はんに水を釜或は藥罐にてあまり長く煮て其儘數時間置く時は再び其中に動物性のもの發生し生水よりも却て有害なることあり故に水一度沸騰せば直ちにおろして瀬戸物の器に移し冷るを待ちて壜に入れ可成は氷の上に置くべし沸騰したる水と雖も異樣の臭氣ありて味惡しきは最早腐敗したるなれば決して飮む可らず沸騰後十二時間を經たる水は生水に毫も優りたることなきなり

食物に制限をおき惡食不消化物を避くべきは勿論なれどあまりに此も惡し彼も害あり食ふ可らずとて排斥する品のみ多きときは每日同じ樣なるものゝみ食するを以て倦厭を生じ食慾を減じ却て健康を害することあるべし且つ人の身躰を組織するには種々なる原素を要するが故に食物には參差あるを要す肉類は滋養分多きとて其のみにては健康を保ち難し野菜類の如きも料理法よろしきを得ば衞生上大に有益なるものなり故に食料

には可成種々なる品を取り交ぜて用ゐ以て一には膳部を美味ならしめ食慾を增進せしむるの助となし又一には身軆を組織すべき要素を充分に供給し得る樣意を用ふべしたゞ新鮮のものを撰び且料理法に注意することは最も肝要なり

次は衣類のことなり流行病の傳染を防ぐの最良法は血液の循環を宜しからしむにあれば常に煖衣を纒ひて身躰を冷さぬ樣にし暑中と雖も薄きフラテルの肌着を常に着し且つフラテルの腹卷を爲し居りて感冒腸胃カタル等を防ぐべし

以上は虎烈刺豫防法の槪畧なれど萬一不幸にして一度該病の家內に入りこまんか主婦たる者にして毫も看病の心得なく醫師の來るまで施すべき手當を知らざるがため驚き狼狽してなすところを知らざるか或は親をあとくし手を束ねて徒らに病勢の加はるを傍觀し居るもの多しかの醫師の許まで馳けつけんも一里二里或は遠きは數里行かざる可らざる田舍家にては殊に然り然らばかゝる際の用心に如何なる家にても先づ數個の湯たんぽ芥子の一壜と葡萄酒或はブランデー並に繃帶にすべき布を準備なし置き如何なる周章の際にも直ちに見出し得べき場所に仕舞ひ置くべし而して病に罹りし者あらば先づ葡萄酒三十「グラム」かブランデー十五「グラム」を與へ或は樟腦精といふ興奮劑あらば此中に五六滴を加ふも宜し次に芥子湯にて脚湯をなさしめ充分溫まりたるを見て靜かに床に臥さしめ湯たんぽを身體の周圍にあてゝ身體を溫むべし又血液の循環の衰へし樣子あらば芥子を湯にてかき晒布にのばして兩足の裏兩方の手首と腹部及び襟首に貼るべし

以上の手當を醫師の來るまで爲しおかば病勢の增加を防ぎ且つ其治療を施すに當り一方ならぬ便宜を與ふるものなり

或時疫病の神一都府に下りきて其住民の三分の一を殺

戮して曰くわれ手づから是だけ殺さば充分なり恐怖は餘りの三分の二を殺すべしと」這は或國の昔譚なるが實に病氣を驚き恐れ神經を起すほど病勢増加或は病氣傳染の助となるものはなし主婦たる者が心弱くして不慮の難儀に出遇ふときは忽ちあはてふためき爲すところを知らざるが爲めに小難も大難となし救ひ得べき患も救ひ得べからざるに至ることは珍しからぬことなれば如何なる危急の場合にも取り亂すことなく怖れず憶せず泰然として是が救助の策を考へ得べきほどの雄々しき氣性を養ふべきなり

手藝案内

編出よだれかけ（毛絲編物）

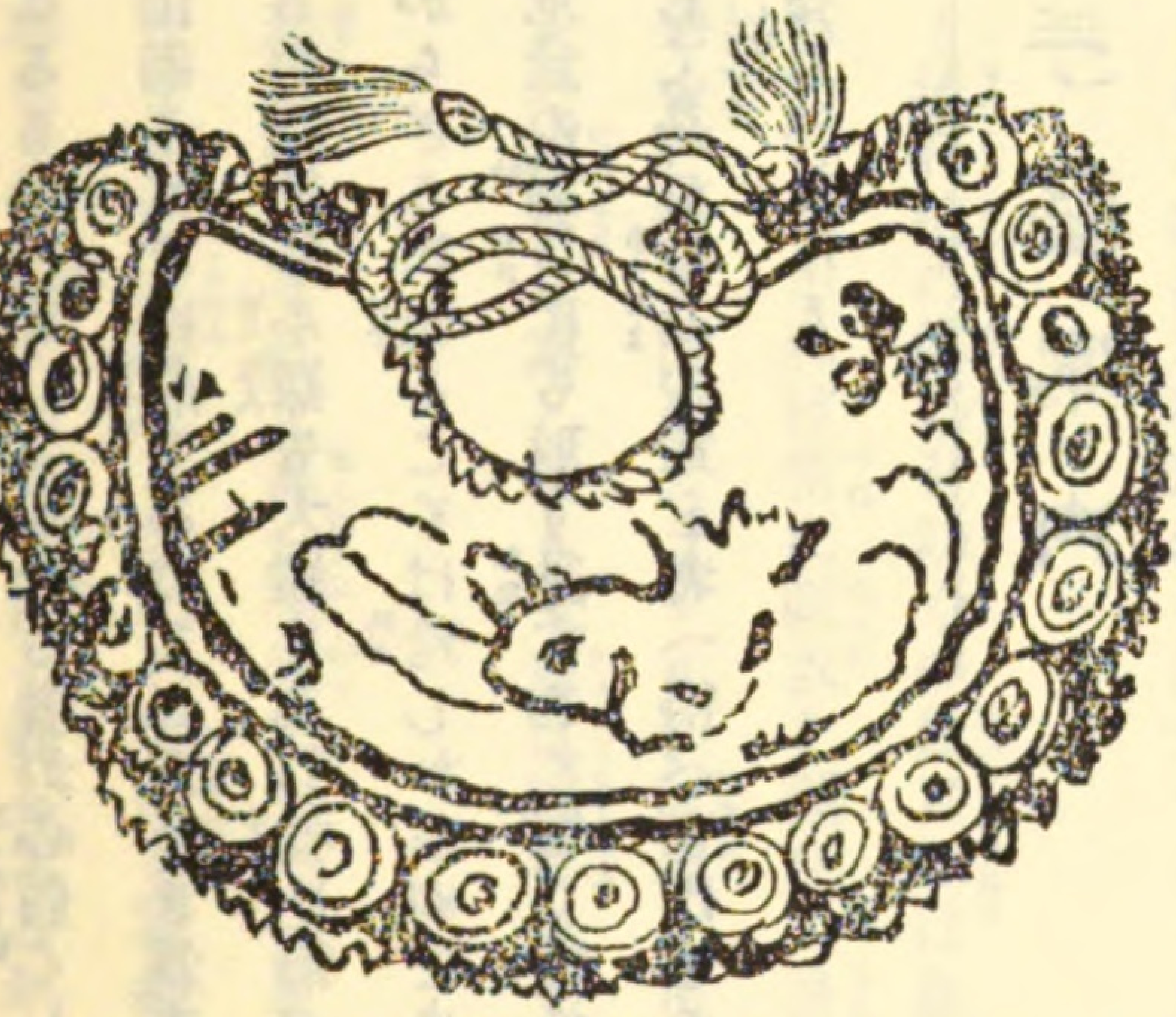
きよ子

地絲中細飾り花極細花周圍中細

地色白、金魚桃色、赤、水水淺黄、垣黒、花赤、葉藍鶸、藥黄、飾花藤紫、花周圍白、

編方は平面。初連鎖編五十六地絲にて右より編出十目一増其より十一目一増其より十九目一増其にて一段は増減なく連鎖編の數の終り迄編むべし其次地絲右八目一増十八目一増此より赤壹、地絲二目一増其次地絲五目一増十一目一増十二目一増地絲一編みて赤一地絲二目一増地絲五編赤二其次右一増地絲三十二編赤一桃一地絲五編赤二地絲三目一増其次地絲二十水淺黄五目一増偕七編地絲三赤一桃四赤一桃一赤一其次地絲七目一増三目一増七編淺黄二地絲十七赤一桃三赤一桃一赤一地絲二目一増十目一増十目一増左終りに一増其次右初一増地絲十五目一増四編淺黄一地絲十四目一増四編赤二桃二赤一桃三地絲七目一増十九目一増其次地絲九目一増十一編淺黄一地絲九目一増赤四地絲二赤五目一増地絲四赤一桃二赤一桃二目一増四地絲三目一増八目

一増左終一増其次地絲十八目一増三編淺黃一地絲八赤三桃四赤十地絲一赤一桃一赤一桃三目一増赤七目一増地絲七目一増十一目一増其次地絲三目一増地絲九目一増十一目一増淺黃一地絲九目一増三編赤一桃二赤三桃十三赤一地絲二目一増二十三編赤二地絲十三目一増其次地絲二十四編淺黃一地絲九目一増八目一増赤二桃十五地絲二十三目一増二編赤一黃一赤二地絲一鶸三地絲六目一増其次地絲十四目一増黑二地絲九目一増三編淺黃十五目



一増一編地絲一赤二桃一赤一桃十三地絲二目一増十二目一増十二編鶸一赤一黃二赤二地絲一鶸四左終一増其次右初一増地絲十二編黑二地絲十一編淺黃一地絲十六赤二桃二淺黃一桃一赤二桃九赤二地絲二十三鶸三赤四鶸四地絲十鶸一其次地絲十四黑二地絲二黑二地絲七目一増淺黃一地絲十六赤二桃一淺黃一黑一淺黃一桃一赤一桃九赤一地絲十一目一増十三目一増四編赤二鶸一地絲一鶸二地絲四目一増左終一増其次地絲十目一増六編黑二地絲二黑二地絲七目一増淺黃一地絲十六目一増赤二桃二淺黃一桃二赤一桃九地絲二目一増九目一増一編淺黃三地絲四淺黃一地絲八目一増八編鶸一地絲一鶸一地絲三目一増赤二地絲六編鶸二其次地絲十六黑二地絲二黑二地絲四目一増四編淺黃一地絲十四目一増三編赤二桃四赤一桃八地絲二目一増十五編淺黃三地絲二淺黃二地絲二淺黃二地絲八赤二地絲一鶸一地絲三赤一黃一赤二地絲其次地絲十二黑二地絲二黑二地絲二黑二地

絲九編淺黄一地絲二十三目一増赤四桃八地絲二十一編淺黄一地絲四目一増淺黄一地絲六赤一黄一赤二鶸一地絲二赤一黄二赤二其次地絲六目一増七編黒二地絲二黒二地絲二黒二地絲四目一増一編黒二地絲四淺黄二地絲二十二赤二桃一赤五桃二地絲二十二目一増二編淺黄一地絲四淺黄一地絲六目一増赤一黄二赤二地絲一鶸一地絲一赤四其次地絲十三黒二地絲二黒二地絲二黒二地絲四目一増二編黒二地絲七目一増淺黄二十目一増地絲五桃六地絲二十七淺黄一地絲四淺黄一地絲三淺黄一地絲五赤四鶸一地絲一鶸一地絲二赤二地絲二目一増鶸三地絲左終一増其次地絲十三黒二地絲二黒二地絲二黒二地絲六黒二地絲二淺黄二地絲十五目一増十四編赤一桃六地絲二十五編淺黄一地絲五淺黄一地絲三淺黄一地絲六赤二地絲一鶸四地絲一鶸一地絲二鶸五其次地絲八目一増四編淺黄一地絲一黒二地絲二黒二地絲二黒二地絲一淺黄一地絲四黒二地絲四淺黄一地絲二淺黄三地絲二十四目一増一編赤二桃四地絲二十三淺黄二地絲五淺黄一地絲三淺黄一地絲四目一増五編鶸四地絲四鶸二地絲七目一増其次地絲八目一増四編淺黄一地絲一黒二地絲二黒二地絲二黒二地絲六黒二地絲五淺黄一地絲四淺黄二地絲二十六編赤三地絲十九編淺黄四地絲六淺黄一地絲三淺黄一鶸四地絲四赤二地絲七目一増其次地絲十淺黄一地絲三黒二地絲二黒二地絲六黒二地絲五淺黄一地絲六淺黄一地絲三十三淺黄八目一増七編地絲[illegible]淺黄三地絲四目一増十編鶸五地絲二鶸五地絲十三目一増其次地絲十三目一増三淺黄一雷二地絲二黒二地絲二黒二地絲七目一増黒二淺黄五地絲四淺黄三地絲十二目一増四十二目一増二十一編鶸三地絲六鶸二此にて編出を終其より全躰を三回地絲にて編飾花は連鎖編三其を輪にし其中長編十三其上帽子編一回長編一回終此花十七個中細にて帽子編と爲て續け編出を裏より合せ花一個の中央四宛留其上を中細にて右の初に附目五に長

編一連鎖四長編の角にて留長編一是を五本宛となして一回すべし紐は太三本連鎖編卅三爲表を前にして右より三匝に帽子編を爲し終れば又三十三連鎖編を爲すべし紐の先は房にても玉にてもよろし

英文一斑

(四)

Caesar entered on his head; his helmet on his feet, armed sandals upon his brow; there was a cloud in his right; his faithful sword in his eye; an angry glare saying nothing; he sat down.

「シーザーは其の頭にて入り來れり、足には甲冑を穿ち、其の前額には甲屐を戴けり、其の右には雲あり、其の眼には忠實なる刀刃あり、怒れる眼は何事をも言はず彼は坐せり。」

斯くの如く、句點の差異に由て、其の意味全く轉倒するを見るべし、句點の大切なる斯くの如し、豈注意せざる可けんや、

金子用達を斷る文

(Address ——)

(Date in full ——)

My dear Sir:—

I am exceedingly sorry that your request comes to me at a time when I am so pressed by my own affairs, that I can not with any convenience comply with it. On any future opportunity, when I may have money to spare, I shall be ready to oblige you.

Jan,
Yours faithfully
(——)
(Name and Address).

拜啓陳者御申越の儀承はり候へ共、小生事少々都合有之殘念ながら御斷はり申上候又た好都合有之候はゞ御用達申すべく候早々頓首

某弟より

某　　君

金子用達の文

(Address ——)

(Date in full ——).

Dear Sir,

I Consider myself much obliged that you have applied to me for what you require, and enclose in this, a cheque for. £ 15, which I hope you will find of use.

Jam,

Dear Sir,

Yours faithfully

(——)

(Name and Address).

拜啓陳者御入用の金額中込み被下難有存候金額十五圓の銀行小切手封入仕候間御受納被下候はゞ幸甚

何某より

某　　君

前々百一號に於て、宛名尊號の事は多少詳はしく論じたれば、今茲には、結尾の語につきて數言せん。普通には Yours faithfully, yours trully, yours sincerely, yours ete. 等を用ゆ社會的階級に從ふて、結尾の語種々と異る、皇族に向ひて最も通常に用ひらるゝ者は左の如し、

I remain, Sir (or Madam), with the utmost (or greatest) respect, your Royal Highness's most dutiful and most obedient servant.

公爵に對しては左の結尾を用ゆ、

I have the honour to be, My Lord Marquis, Your Lord ship's (or Madam, your Lady ship's) most obedient, and humble servant.

伯爵に對して

I have the honour to be, My Lord, Your Lord ship's (or My Lady, Your Lady ships) most obedient humble servant.

寄書百珍

摸範的婦人

福島縣安達郡鈴石　中村生

我理想に適する婦人を物し候へば

第一　性質、溫良恭儉にして學を好み喜怒色に顯はさゞる程の沈毅の心を有し

第二　品行、貞節にして身命を抛つと雖も其操を汚さず但良人死去の後は聖愛を以て再嫁するを妨げず若し舅姑貧ふして養ふ人なき時は貞女の操を盡くすべし尙ほ說あれども容す是れ我國の重要問題なりと信ず

第三　志操、崇高の宗敎心を有し古今の史傳に載せ或は現存せる良妻賢母の流風遺韻を慕ひ賢を見て齊しからんことを思ひ若し夫れ良人の逆境に處しては益々滿腔の熱愛を注ぎて慰藉し良人の爲めに祈り平居此の心を推して身に施し人に及ぼさば此婦人の一個の志操中に胚胎せし英傑才人豪俊賢妻良母淑女等油然沛然として時雨の降るが如く發出し國家の文明進步高潔改善に寄與するの功實に圖り知る可らざる者あらんと信ず

こゝに於て我摸範的婦人の天職能事畢れりと可申候

愛知　紅香生

余は余の妻を以て模範的婦人と致升身躰は强健でありまして既に男女三人の兒を持ちました月々私の收入が金九圓で妻の內職を以て參圓程宛得升合計月十二圓程を以てなか〳〵上手に活計を立て升其證據には月末に成り升ても米屋からも薪屋からも酒屋からも何處からも只一本も書出が參りません又小兒には可愛らしき

姿をさせまして長男には日々學校に通わして居升亦時々有益なる面白き話を爲升から小兒は樂しく遊び升そして氣前の優さは親族及近邊の人にも人望が宜しう御座り升私の目からは美人であり升

孤舟

婦人は萬事夫の指揮を受けて家庭を治むべきが職務なれば、温良從順ならではかなはず。されど餘りおとなしきに過ぎて優柔不斷ならんはいふかひなし。快活に淡泊に寬大に、人の心にも逆らはず、さりとて輕薄に走らず、阿諛に流れずして、同情に富みたらんぞゆかしかるべき。さて又將來國家元氣の源たるべき青年子女の根本的敎育を掌るべき重責を負へる方よりいへば、品行の方正なるべきはいふ迄もなけれど、之に接して夏日の照りはたゞく光に向ひたらんが如くならんよりは、枝も鳴らさず、花も散らさず、吹くとしもなき春風の如く、自ら氣を和ぐる方にあらまほしく、志操は堅固に高尙に、浮華虛榮に迷はされず、處世の難を意とせず、孝悌の致仁義の道を奉じ、其の國のために其の家のために、忠良孝順なる子女を育成せんことを任務として、一生かはらざらんものこそ世の鑑とも崇むべきなれ。

西肥　蘇民生

上帝を信じ仁慈と憐恤の心あるものこそ吾人の模範的婦人なれ性質、志操、品行皆此中より來る殊更に縷述の要を見ず

西陣　嬌風生

拜啓小子の最も尊ぶべき最も欽望すべき摸範的婦人は左の要項を備たる佳人に有之候

（一）温順柔和にして一種活潑の氣を有し身軀健康

にして普通教育を有するもの

(二) 品行方正にして毫も浮たる心なく良人を輔佐し家事を善く整理し下僕下婢に至る迄目を掛けて旨く召使ふもの

(三) 子女の教育に意を用ひ衣食住に驕らず華美なる流行物を好まず專ら質朴を旨とし粗食粗衣を以て意を滿たし健全不屈なる家庭を作るを心掛くるもの

(四) 芝居俳優の噂を喋々し又は虛言を吐き或は朝化粧等に貴重なる時間と經費を徒費せず專ら下婢等と供に立ち働くもの

(五) 父母に孝養を盡し良人を愛し兄を敬し弟妹を憐み親類縁者に反らはず一家の和樂を計るもの

(六) 容姿清雅高尚にして威嚴の中に一種特有の愛嬌を有し他に慕るもの

(七) 嫉妬及び迷信ならざるもの

以上の要項を具備せる婦人は禮義、慈善、德義、節操、貯蓄、衛生、經濟の如き自然と兼備せらる樣に相心得喋々を要せず候先者小子の想理に浮びたる模範的婦人に有之候

東都 落葉生

我が愛らしき慕はしき佳人は笑める花の如く、滴る露の如く流るゝ清水の如くやさしくして又情に濃く理義明らかに道具はりて偏せず、才ありて蓮葉ならぬ人ぞ、

成人ぶりて、むづかしき書讀むも、こざかしき、手のわざも我に望ましからず花の如き月の如き愛らしの吾妹と共に樂しき我等が家庭に勸めなば、春の霞や靆かん秋の紅葉や散り去かむ、

大阪　安枝愛濟

外面の美醜は問ふ處にあらず願くば女子たるの道を知つて夫婿をして内顧の患なからしめ一家の和樂を保ち得て萬事質粗にして善行を好み居常清潔なるを好み何事に依らず言ふよりは耳く行ふもの

日佐天外

人の是非を窺はんと欲せば其地位に鑒みざる可らず我國家庭の紊亂せるや一日に非ず婦人は男子に隷屬し唯命維從を以て唯一の鐵案となす然れども婦人は斯の如くにして止むべきにあらず必ずや家庭の主宰者たり快樂の源泉たるの地位に立たざる可らず保守的淑女は我之を憐む而も未だ之を頌する能はず我は遂に進歩的婦人に與せん哉請ふ少しく之を論ぜん世は無事を以て太平の兆となす何ぞ知らん抑屈的被治者は專制的治者の前に沈默し抂げて太平を粧ひ暗夜密に旻天に號泣するを保守的淑女亦此類のみ我は男女の權力の平衡を望む而して權力平衡の源泉は婦人の自營的伎倆に在り是れ進歩的婦人の第一要素たり婦人既に權力を有せば子弟を敎育するに於て自ら勇往果敢なるを得べく耳人をして自ら放縦を免れしむべし

然れども

氣に入らぬ風もあらうに柳かな

婦人は快樂の源泉たるに顧みて温和ならざる可らず是れ進歩的婦人の第二要素たり父子の親夫婦の愛妙機常に此間に存し德望亦之より生ず曰く貞節曰く緻密曰く勤儉曰く何曰く何此の如きは世既に定論あり屋上屋を架するの要なし能く進歩的婦人の要素を具ふるものにして始めて一世の摸範たるを得ん哉

社告

次號第百四號(六月廿五日)よりの寄書百珍問題は左の如し

『家庭的避暑法』

如何なる家庭如何なる人にても年々家庭的避暑の最良手段あるべし

曰く湯治曰く海水浴曰く舟遊曰く旅行曰く山遊曰く何々曰く何々所謂家庭外の避暑法は多く且つ世に紹介せられたり

吾社此問題を掲ぐる目的は如何にして容易に、安樂に、愉快に家庭内の避暑法を行ふのかにあり

要は家庭的避暑法の最上手段を掲ぐるにあれば一行にても十行にても可及的簡潔なる寄書こそ望ましけれ多種及多數を臚列して愛讀諸君の一粲に供せん

江湖同愛の諸君子幸に寄書の勞を吝む勿れ

社交一斑

流行の栞

夏期流行の履物　　流行子

男子の駒下駄、臺は堂島のノメリ（雨グリは藝人粹士社會に持噺されど實着堅氣のものには餘り向かず）、表は南部或は藤表、鼻緒は鱘の翼輪、さかげ、うづら等にて、裏には鹿皮か鼠一樂を流行の上々さす、其他甲州印天形付印天等も從來に變らす善く流行す。

婦人用の駒下駄、臺は大抵白木横柾の兩抉か又は小町にて、堂嶋は漸く廢り來るの傾きあり、跡丸も高サ二寸以上のものにて黒塗なれば少く流行すれど白木に至りては殆ど皆無の姿さいふべし、臺は男子さ同じく南部か又は藤表なれど夏季は藤表の方を多く好むさ見え、麗鬼の巾きもの流行の最上を占む、鼻緒は本天にて新櫻、柿色、今紫、紫根、銀鼠、魚茶等の華美色、太さ九分より一寸位迄のもの年若の婦人に專ら流行す、其他老人には黒木天か御納戸の鼻緒を最多く見受く、令孃にはボックリの臺に藤晒（純白）の表を着け、縮珍、紗ブラチ、風通、一樂等の鼻緒をすげたるもの現今一斑の流行なり。

雪駄は南部表の二枚裏ならば少しは使用あれど最早や流行界より追々さびれ行きぬ。

帷子と浴衣地

令閨向帷子　には第一に鴨川上布(紋織透谷の事なり)にて柄は紋織御召を應用したるもの、一廾、角通、斜萬筋等の如きを最上とす、(假十二圓より十四圓)、第二には壁透谷にて柄は多く縞絣、地色には銀鼠、淡利久、壁鼠等の如きなよしとす、(假五六圓)、第三には越後透谷の紺地に白の微塵か萬筋、千筋、十賊等の柄を最好しとす(假五圓內外)、第四に流行すべきは越後縮の紺絣なり(假四圓より六圓五十錢位迄)、以上は總て本年流行すべき令閨向の帷子なり、其他に珍柄を撰ばんとせば御納戸地の子持千筋、利久の綱代縞、千歲の竹の筋隠分面白からん、次に

令孃　の着して目に立つは矢張前記の鴨川上布にして縹色、御納戸、鳩羽鼠等の地色に、籬垣に菊、崩し牡丹、紅葉、立枠に矢絣等の柄を染め出せしもの第一等にして次は同じく壁透谷、越後透谷等なり、柄は兩者共に年一年に斬新なるもの現はれて大に需要者の時好を迎へんとす、譬へば御納戸地に松魚縞、又は瀧縞なぞは殊に意氣なる人に向く所のものにて、縹色地又は鐵色地に大摩薩縞、亂立、柳縞等は專ら品善き人に好まる所のものなり、絣に至りては越後の紺地の內に多く、井桁、大蚊絣及花絣最宜かるべし。

男向の帷子　は第一本場薩摩上布の薄地に十の字の細絣、か又は大名縞なり(假三十圓より五十圓)第二は矢張薩摩上布の少しく地質の厚きものにて、十の字、井桁、猫足、龜甲等の絣あるをよしとす(假十二三圓より廿五圓)、第三は越後の正紺染の上布にて、柄は十の字と井桁と大名の三種に限れる如し(假十四乃至二十圓)、第四は薩摩又は越後上布の白地の絣にて、就中十の字と大名は最も流行の傾向を有す、(假十二三圓)、第四には縞越越紺地の千筋、萬筋、微塵、崩し等の細柄最も好く流行すべし(假四圓より六圓迄)以上は男子用の帷子なり。

男子の暑中羽織、　地質は例の紗を黑の三所又は五所紋に染めたるものに限れるが如し、(之にて假四五圓)、其他縞物に至りては越後透谷大名、萬筋、崩し等流行すべし(假は二圓以上)。

浴衣地、　は男女を通じて(一等)互斯糸の白縞、(二等)眞岡の染形、(三等)縮の染形、(四等)阿波縞、(五等)地機織なぞを善しとす、以上の內白地の紺にて縞又は古代模樣を應用して工夫し出したる新形模樣は格別今年の流行ならんと　想す(假一端につき八十錢より一圓五十錢迄なり)

雜錄

那須野育兒 曉星園（下）

酒井生

三島開墾地孤兒院　子爵三島彌太郎氏は基督敎徒にし

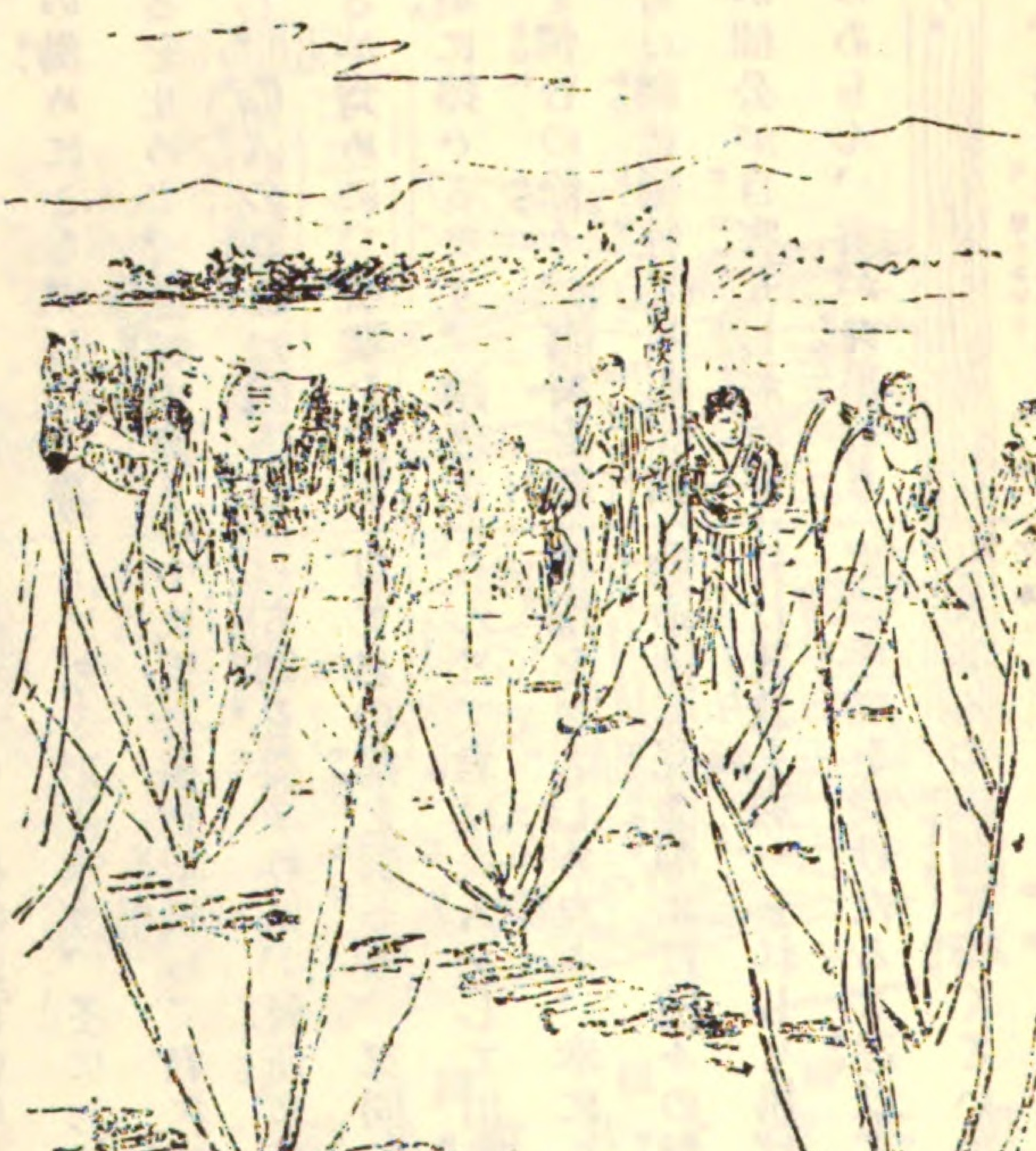
て萬事君に同情を表はされたり、且つて同地は西那須停車場を距る僅かに十町許にして、萬事好都合なりしが、何分一度開墾地なりし荒地なりしを以て、非常の困難を感じ、翌年迄、何の收獲もあらざりき、此地に轉ぜし後は種々有志の寄附を得、三百九十圓の園舎を建築し、桑畑一町歩を金八十圓にて、桑樹を六十圓ににて買求め、外理髪舘を設け、機織場を調へ、械機十一臺を備付たり。

大困難の中、會計上の負債は悉く償却し、感謝を以て廿六年元旦を迎ふ、會計は唯一厘を餘すのみ、君靜に兒童を集め、中命記書章を讀みきかせ、十誡を說き、又孤兒院にかゝげある「神が雅を以て毎日肉とぱんをエリヤに送る圖」を指示し、今孤兒院會計只一厘なれども、昔エリヤを養へる神は、今孤兒を養ふべし、故に各自只其職を守れと勸めたり、かくて其日も樂しく過ごし、翌二日となり、君は出でゝ禮巡りせんとするや、牛島要一は肺炊衝を以て危篤なりしを以て、君八方奔走せるも、遂に効なく死せり、而も園の會計は依然として一厘なり、此困難に逢へる君の心中如何、而も君は只祈禱をなせり、而して又應答あり、不思議にも京都丸太町基督敎講議所より、クリスマス贈物として金五圓送られたり、君深く感謝し、其金を取て葬送せり。

桑畑出來、家屋亦廣からざるに非ず、一同奮勵せば、養蠶を以て自活の道を開くと出來ざるに非ざるべしと、君即ち春蠶種十一枚を飼育せり、されと君未だ養蠶に馴れず、如ふるに助手皆幼少なり、遂に大失敗をなせり、君敢て屈せる所なく、夏蠶種七枚を飼養す、失敗は失敗を伴ふ、君又失敗す、(此時夫人一女を產む、君愛子と名く、曰く神の愛によりて產むと、君大に慰めらる)、君は失敗に打負くべき人物に非ず、失敗は成功に近くの一歩なり、君が二回の失敗は只金錢上

のみ、而も失敗は君には學問たるなり、秋蠶（七枚）の時に至りて、夫人も漸く産褥を離れ、女子部を督して養蠶し、君は農事部を督し、鍬を取りて働きしが故に、芋甘藷、蕎麥、大豆等を多くを收穫し、又多くの絹を織上げたりき。

家屋漸く出來、自活の道亦大に備はる、されど不完全なるものは病氣に對する治療法なり、會々仙臺高等中學校醫學部卒業生鬼川貫一氏來り、漸く附屬慈惠醫院を設立せり、然れども當時尚孤兒院大困難の時代なりしを以て、醫院必要の器械、藥品は全く備ふるの資なし、かゝる時に鬼川氏行き、時田氏代り來


曉星園桑畑

る。器械、藥品を得るは、決して人爲の能はざるを知るが故に、本鄕君は十月二十五日より每夜、夜半に野に出て神に祈れり、大木を倒すべき暴風も、盆を覆す大烈雨も、手足を凍らすべき寒風も、君の堅志を妨げ得べからざりき、咳嗽烈しき故に中止せよとの醫士の忠告も孤兒を思ふ君には、殆んど馬耳東風の觀なくんばあらざりき、かくて君は十二月廿六日迄、殆んど六十三

日の間此祈禱を續けたり、嗚呼最後の二十六は日終りぬ、廿七日午前一時となりぬ、俄然君は「ミルク」雖一杯半の吐血をなせり、嗚呼君は肺結核となりて臥しぬ、されど讀者よ、君が醫士の勸めによらずして、身の不養生よりなりしなりと嘲るを止めよ、熱情の偉人の運命は常にかゝるものぞかし、偉人の身命は偉人の身命に非ず、偉人は國を愛するが爲めに、事業を愛するが故に、其生命を國家と事業に捧ぐるなり、讀者よ本鄕君を罵る勿れ、君は孤兒を憐むの餘り、其身を顧みるの暇あらざるなり、君の身は神に犠牲となし、孤兒院事業に献げたるなり、誰か楠公が自害せしが故を以て楠公の偉功を抹塗するものあらん、君が此事ありしは君の豫てより期せし所なり、

其より數日の間君が吐血絶えず、君は最早最後と覺悟せるものゝ如し、兒童を集め、夫人をして默示錄廿一章を讀ましむ、夫人は涙潸然、漸くにして讀み終る、

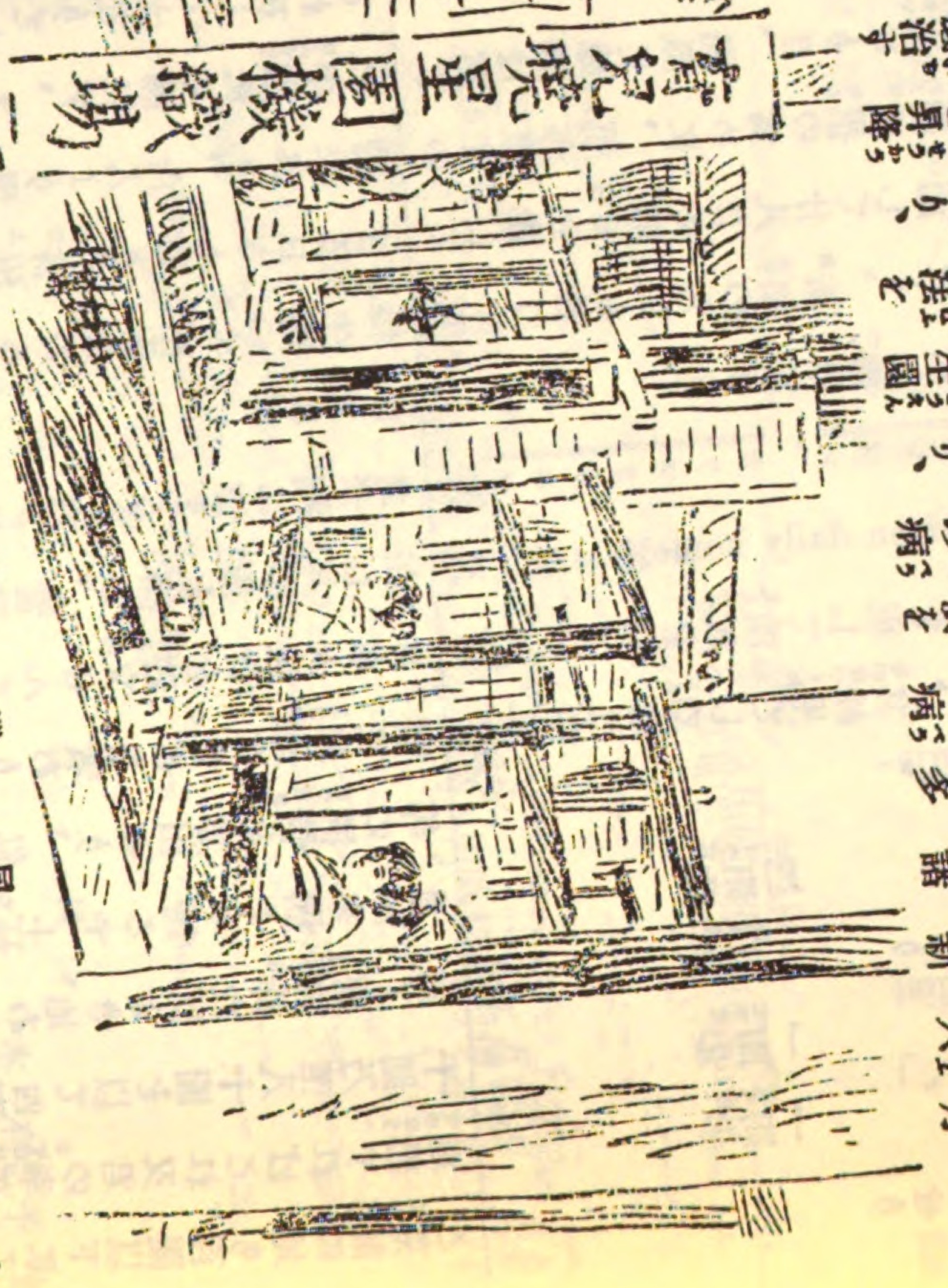
嗚呼彼等の心中如何なりしならん、最も君を惱ませたる頑童も、靜に祈り始めたり、君が胸を冷す氷を要すると云へば、彼等は毎朝早く起き數里の遠き山麓に至りて氷を取り來り、冬にして食物なければ、各自の懷中に百合根を取集めて君に食せしめ、又ズープを作るべき鷄を要すれば、各所に至り集め來りて君に呈し、以て君の病を養へり、又同年は最後の「クリスマス」ならんとて君は夫人をして出來る丈け樂しくなさんと其準備をなさしめたり、幸にも諸宣教師より、種々の贈物ありて兒童等には種々の贈物を與へたり、されど孤兒は紙鳶を與へられしも揚げず、羽根を得たるもつかず、手毬を受けたるも遊ばず、而して皆曰く

　父さんの御體に響くといかない

美味も彼等には美味ならず、彼等は只諸所に集まりて、君の爲めに祈れり、嗚呼之を聞くもの誰か腸斷の思なからん、況して其時に之を耳にせる本鄕君の心中

如何なりけん。

君醫の勸により、廿八年一月十一日を以て、赤坂病院に入院す、君の肺結核の事一度新聞に載るや、見舞の贈物は諸方より來り、金額亦非常に多く、孤兒院は遂に之を以て病院必要器械を調達し、負債を償ひ、孤兒の食料及び君の病養費用に充分の金を得たり、君後赤坂病院を出で、養生園に入り、數回の注射治療法を受く、されど熱は益々上り、三十八度及四十度の間を昇降せり、依て君は最早到底治すべからずとなし、一度園に歸り、孤兒等に遺言せんと決心し、君は五月一日を以て、一ト先づ那須野に歸る、不思議、君が園に歸るや、熱漸々減じ、病亦衰へ、君は杖を農場に曳くとを得るに至れり。



同機織場

君が肺患は漸く快方に趣くと雖ども、孤兒院內にあるとは只夫人の苦辛と兒童の悲哀を增加するのみなり、如かず暫く院を離れて保養せんにはと、君は一は保養の目的を以て、一は該事業の發達を目にせんが爲めに、種々の困難を排し、遂に米國に向て出帆せ

り。

君が此航海は稀有の難航海なりき、颶風と鯨濤は常に君が船舶を圍繞せり、機關破損の爲めに、航海停止の厄運に逢ふと前後三回、而して廿八日の時日を費して漸くポートランドに着したり、祈禱の人なる君は此間只聖書を手にして祈禱をなし續けたりき。

君が米洲に着せる後は、オレゴン、カリフォルニヤ洲等の孤兒院、盲啞院、Children daily home等を見、又は農場を視察し、又は病身を犯して演説を以て、幻燈を以て、君が事業を語れり、其結果として君は在米日本人より左の寄附を得たりき、

桑港美以美敎會より　二町歩
オークランド美以美敎會より　一町歩
桑港青年會より　一町歩
金門英學校生徒より　一町歩
一町歩は五拾弗宛の割を以てせり

これ決して大なりといふべからず、否君が豫期せる者の半數にも滿たず、されど君は滿身喜悦に滿たされて歸來れり、白人より得たるに非ずして、同胞而も富まざる日本人よりの寄附なりしが故なり、殊に金門英學校生徒の寄附を見たる時は、君は涙潸然たらざる能はざりき。

君米洲に留まると六ヶ月餘、歸航布哇に寄り十日間滯在し其事業を語る、當時布哇在留日本人は、八千弗の日本人敎會を建立せんとせる時にして、信者の財政は實に容易ならざる者ありき、而も君が一場の演説は彼等の同情を惹出せり、忽ち百弗の寄附金出づ。

君が米洲より歸るや、土地購買の事を三島子爵に計る、曰く暫時待たばよき地あらんと、君肯ぜず、一町歩五十圓乃至八十圓を以て四町五段の荒地を買ふ、(今より追想すればこれ又君の幸なりき、現時に於ては如何なる荒蕪の地も百圓以下にては求むる能はざればなり)

寄附の紀念として其地を左の如く名く

「エス、エフ、エム、イー、エム、」

San Francisco Methodist Mission.

オー、エム、イー、エム、

Oakland Methodist Mission.

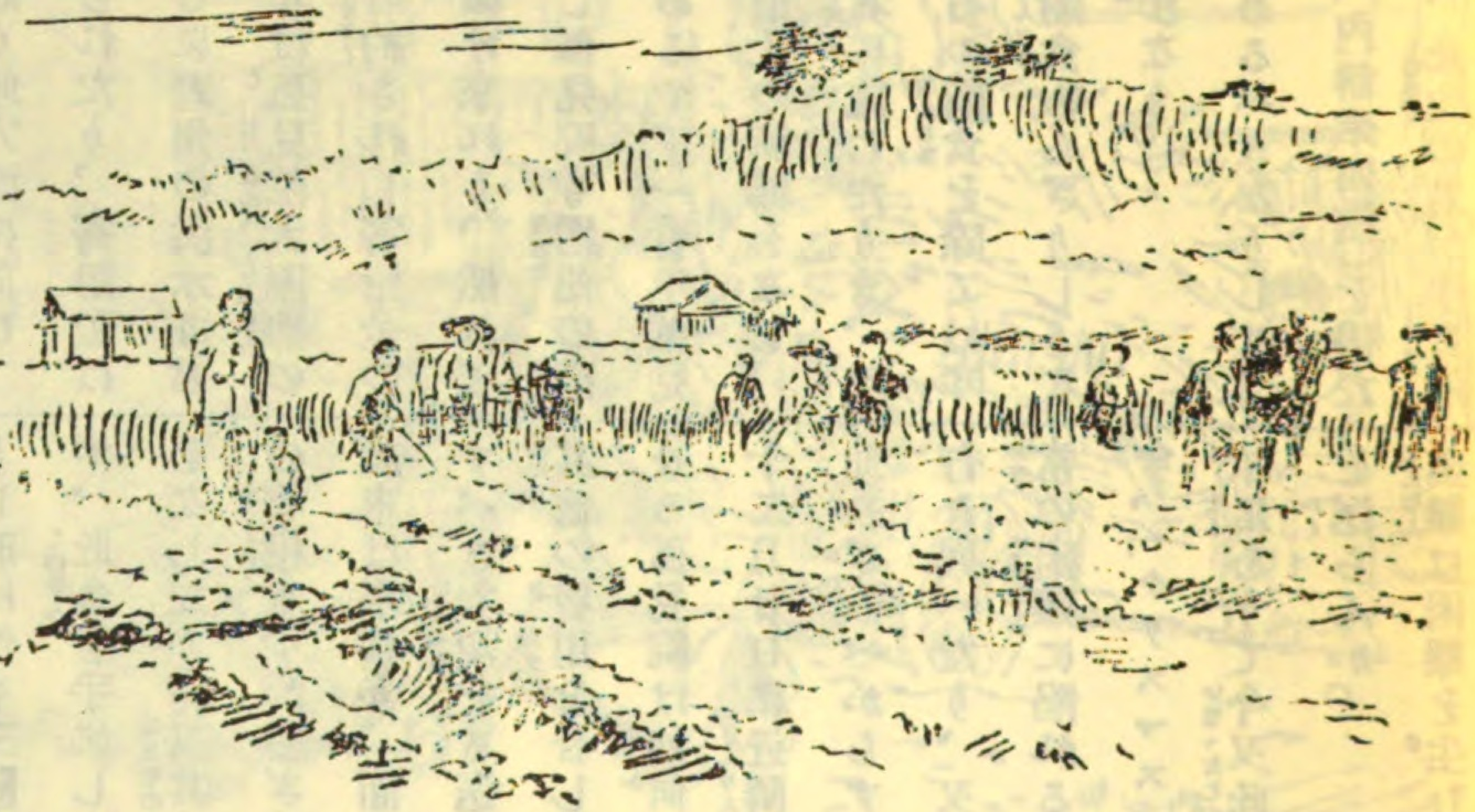
エス、エフ、ワイ、エム、ヒー、エー、

San Francisco Young Men Christian Association.

ジー、ジー、エス、

Golden Gate School.

之を孤兒院の畠に合すれば七町餘なり、(内二町餘は林擒、二町



同　耕　作　場

餘は桑園なり)。

予は昨廿九年に於ける孤兒院の有樣を記せんか。

本郷君曰く

昨年は孤兒院の大飢饉年なりき、予が其年の前に渡米し、其年の春に歸るを得たりしは確かに神の攝理に非ずんば非ず

昨年は孤兒院に於ける大飢饉年なりき、生れて七年の星霜を經たる孤兒院の生涯は決して永しといふべからず、而も久しきに堪えざる日本人は漸く孤兒院を忘れんとせり、此時に際して大海嘯、大洪水及天變地異は日本

全國を襲ひ來れり、人民の腦髓は悉く此方面に向ひ、彼等の腦中には孤兒院事業は忘れられたり、寄附金はなく、贈物は來らずなりぬ、加ふるに野州の洪水亦君の田畠を暴すあり、實に明治廿九年は孤兒院大困難の時期なりき、幸にして君が液米の時約されし寄附金の送られしを以て、僅かに其生命を續け來れり、然れども忘るゝ勿れ、此困難時期にありし孤兒院も猶他の困難の救助を忘れざることを、其洪水あるや、一靑年孤兒の發起により、一度の斷食を以て雨止の祈禱をなし、其食料一圓三十七錢を近傍の災難者に施したりき、又記すべきは此困難なる孤兒院も、右の斷食を除ては昨年中は一度も、必要上よりなせる斷食あらざりしとなり、これ該院起りて以來の一大進歩なり。

廿九年に收獲すべき米は六十餘俵あるべきなりしも、洪水の爲めに減じて僅かに廿六俵(内餅米四俵)を得たり、養蠶は六十圓の收入ありしが、此金の君が手に入りし時は恰も三陸海嘯の前日なりき、君此報に接するや、此金を手にして直に被害地に行き、非常なる奔走をなしたり、又其他蕎麥三四十俵あり、大豆小豆芋等の收穫も少からざりき。

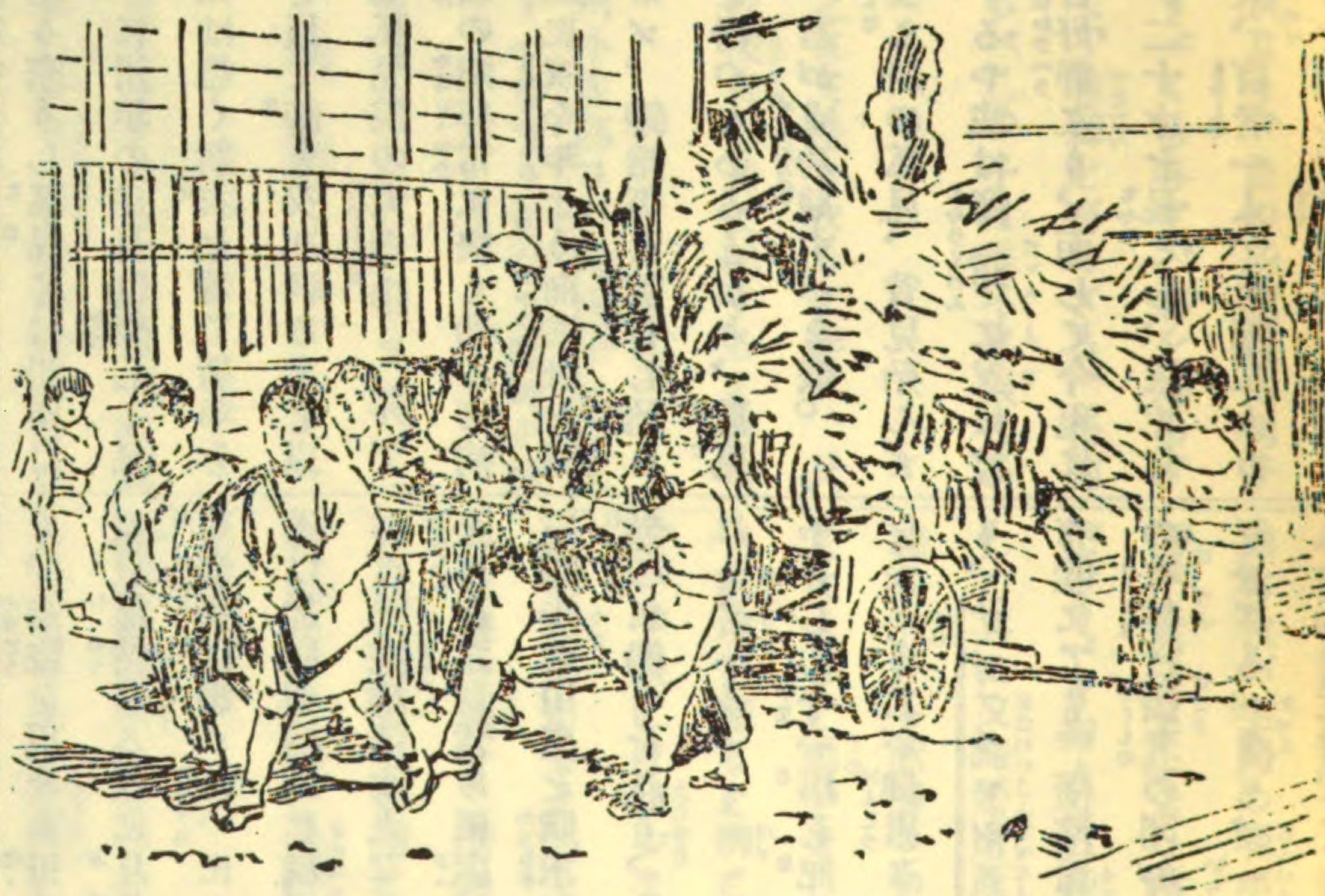
歳末は來れり、而も饑饉年なる廿九年には、孤兒に着すべき衣類をも送る人あらざりき、玆に於て衣類及び其他の費用を合して差當り八十圓の大金を要す、貧窮せる孤兒院は如何にして此大金を得べきか、加ふるに十二月廿日に近隣の貧民に圓燒となれるあり、之亦救助せざるべからず、君即ち孤兒院より二枚の蒲團を持行き與へたり、又一知人の僅か五圓の金圓の爲めに非常の困難に陷れるを見たり、これ亦過視すべくも非ず、「クリスマス」事業として之を助けたり、八十圓の不足ありて今又此事あり、孤兒院は如何にして廿九年を送らんか。

困難は困難を生む、君曰く

廿九年に於て孤兒は「クリスマス」の兩親を失へり

兩親とは仙臺のモール氏と、櫻井女學校のツルー夫人なり、二人は毎年「クリスマス」に際して濮大の贈物を送りし人なりしが、モール氏は他に轉じ、ツルー夫人は逝去したりしが故なり。

困難に加ふるに大恩人徃く、可憐の孤兒は如何にして「クリスマス」を迎ふべきか、十二月廿八日は過ぎぬ、降誕祭を祝すべき廿九日は



師弟共力

來れり、未だ何のよき法もなし、既にして君は不足なる二三枚の衣類を整へんが爲めに出行けり、歸り來れば嗚呼不思議とやいはん、横濱なる堀氏より「クリスマス」贈物として廿一圓來る、既にして曾て君が手にて養ひ、今は桑港にある一孤女より二十弗及在米知人より六弗六十仙の爲替來る、君及夫人の喜悦如何なりしならん、かくて孤兒は樂しき「クリスマス」を迎えたりき。

大困難に續き來る者は大喜

悦あり、飢饉なる廿九年を送り來りし孤兒には卅年は一大幸福の年ならん哉、第一に卅年の正月は樂しく且つ美はしき正月なりき、孤兒は悉く新衣を着て新年を迎へたり、彼等は彼等の手を以て蒔き又刈れる米を以て作れる餅を食せり、これ豈孤兒院の大進歩に非ずや、否之よりも快しきは父君の病非常に快く殆んど病者の如くあらぬとなり、第二に又今年より商業部を開き、太物、鹽魚、鰊、シャボン、鑵詰等を販賣し始めたりしが、大に其地の信用を得つゝあるとなり、孤兒院漸く幸運に向ひ始めたり、君が成功期すべき哉。

君が此事業を始て以來、其養ふ所の孤兒、貧兒殆んど百三十餘名あり、其漸く長ずるや或は商館に又は會社に送る、而も彼等は凡て皆好評なり、而して今現に院にある者は三十六人なり、二十才を長とし、三才を最幼とす、此中には啞者一人、盲者一人、白痴二人あり、又母の屍骸の乳にすがりをりしを救はれし者あり、竊盜を犯せる母の手にて獄中に養はれし者あり、又は無情なる親に見捨られし棄兒あり、其他有らゆる可憐兒は悉く此中にあり。

予は加藤菊治氏に就て一言せん、彼は「フヰラデルフヰヤ」號乘込水夫なりしが、大に孤兒院事業を賛成し、全身を之が爲めに獻げんと誓ひ、且つ今年七月迄に二三町歩の田畠を購求して孤兒院に寄附せんとて、今は熱心に働きをれり、今日迄彼は百圓の金圓を寄附し贈れりといふ。

予をして今一事を記せしめよ、事業の爲めに右肺全部を失へる君が健康なり、那須野に於ても、東京に於ても、サンフランシスコに於ても、オークランドにても、布哇にても、横濱にても非常の咯血をなせる君が現時の有樣は讀者の聞かんと欲する所ならん、予は長くは記せざるべきも、一言にて之をいはゞ、君は少しも病人の如くに非ずといはんのみ、君が體軀は元より痩せ

をれり、而も君が容貌は「ブライト」なり、君が談話は快活なり、君が擧動は壯快なり、世の所謂輕薄男子の容貌は到底君の容貌に比すべくも非ず、君を知らざる者は決して君が容貌を見て、右肺を有せざる、否肺患者なりとも思ふ者あらざるべし、予は唯不思議といひ、奇跡といはんのみ。

君が生涯及其事業は決して之にて盡きたるに非ず、只紙數に限りあればなり、餘は後日を待て記するとあるべし。（完）

◎寄附　我家庭愛讀者遠州小笠郡日塚村西尾左金氏より金壹圓同園へ寄送すべきやう吾社へ郵送されたり

婦人嬌風事業（一）

其起原

米國ニューイングランドに曾てルウエスと呼ぶ一家族棲めりその子デオといふ者後日ボストン府の有名なる醫師米國の產せし醫學者の中巨擘となりしが二十年前即ち彼が生路の晚年に於て彼は米國の西部に巡遊し『吾人の女子』なる題を懸げて婦女子の力能才識を稱し『來るべき婦人は』必ず大に爲すあらんを證して演說せしと共に又結婚財產等に關する不公平なる法律及び家庭に於ける飲酒の如何に婦女子に不利なるやを說きて大に人心を動かせしがその演說中常に彼が母の經歷せし難境を語るを例とせり、曰く

「私の家には幼少な子供が澤山でしたが父は非常な飲酒の癖がありました每日父が酒店に出で行きます後に私の母は獨り二階に上り行きましたが下つて來なさる時には何時もその顏に云ふに云はれぬ光りがあるやうで慥かにその神と物語つて居たのだと云ふことが明らかでした、

家庭の事情は日一日と悪しく悲しき形勢になり行きました或る日母は突然その色さめた帽子と肩掛とを着けて

聖書を片手に持ち靜かに家を出で丶私共の父が時も金も投げ込んで浸たつて居る酒屋に參りました、私共の父をも亦家族をも疲弊せしめました杯の載せてある酒屋の賣臺の上に聖書を置いて朗らかな聲にて「隣人の唇に酒壺を置くものは禍なるかな」といふ句を讀み上げました彼の女の温和な風姿を誠深い音調の中に何處やら神聖な樣子が顯はれて背き難く思はれたものか彼の女が賣臺の後ろに坐して居つた酒屋の主人に祈禱してもよいかと云ふことを尋ねた時、主人は其願を許した斗りでなく自分も共に酒樽や酒壜の側に跪いて彼の女の熱心な祈りに耳を傾けました、祈りは無益ならず、酒屋の主人は再び我が父にも他の人にも酒類を賣らぬやうになりました、私共の家庭は幸福なものとなり今は已にこの世に在らぬあの神聖な母親の子は一人も曾て酒を嗜んだり神の名を瀆したりしたものはムいません」

此の簡單なる物語りもルウエス博士の熱心なる心より迸りて凡ての聽衆を感動せしめぬ、博士は切りに勸告してもし今の婦人等も奮ふて凡ての村町市に散在する酒店を除去せんことに盡力しなば博士が幼時の家庭を罪と禍より救ひたると同じき神聖なる効果あるべしと述べたり

幾多の集會にて博士は幾度か此事を操り返して善良なる婦人に早く旗を擧げんことを勸めたるが二個所にて熱心なる贊成を受けられぬ然れども遂に巡りて千八百七十三年十二月二十三日オハヨ洲の大都府センセナティより程遠からぬヘルスボロの小村に至るや造化の時辰儀は恰も婦人矯風事業の時到れるを報じ爾來着々歩を進めて今や世界の文明諸國に斯の事業の敷かれざるなきに至りぬ

「搖籃」なるヘルスボロ幷に「禁酒軍の王冠」なるワシンゲトン、コルト、ハオス、の二ヶ所より靈火の彼は流れ

〳〵て米國西部の凡ての村落、市邑に溢れぬ神聖なる大氣空に充ちて傳染する如く人々言ひ難きの靈氣に感じたり

熱涙の祈を包む婦人の群は家と敎會堂と酒店との間を行きつ戻りつなしぬ、時には僅か十二或は二十の數に滿たざるかと思へば時としては數百の婦人相集ふもありき彼等は絶えず祈りて酒店を圍みもし入るを許るされざる時は戸外に集ふて跪き祈りぬ

平和の鳩の如く場所を覆ふ不可思儀なる勢力に服せられて酒店の主人一群の長を招き入れ店頭にならぶ數多の酒樽をうち毀わさしめ酒精の流れて下水溝に入ると共に讃美の歌は高く唱はれ寺院の鐘は鳴らされて人の喜悦を告げし機會も暫々ありき、

毎夜敎會堂は酒店に通ふ客に開かれ前夜まで酒店に運びし歩行は轉じて會堂に向ひ其の傳道を聞かんとする者多きに至り日曜學校及び敎會の聽衆は百倍の多きに上り數多の酒店は殆んど客を絶ち二百五十の市區にて酒精の販賣は全くうち破られたり

婦人矯風事業の大火は熖々として全共和國及びカナダに燃へ移り遂に海を超えて濠洲、印度、支那、日本に及ぼし、爾來「神と家庭と各國の仇敵に」抗する婦人の事業は整々運び進まるゝなり

（未完）

休翁（口繪の解）

和泉國堺に、休翁といふ豪商ありて世に聞え、奉行人をも數多召使ひけるが、其家を起しし始めを聞くに、休翁、手づから料理するとを好み毎月、日を定めて自づから俎板にむかひ料理して酒肴をとゝのへ、わが店にて商をはたらく奉行人を客として、之をもてなし、さて言ひ渡しけるやうは、幸に其許達の働きを以て家業日に増し繁昌せりこれ我一人の働にあらず、衆人皆折りて我に忠を盡くしたまはるが故なり、今日の酒食

は聊謝禮の志にして格別の珍味にはあらねど、こゝろよく過ぐさるべし、かゝれば今日一日は我客にして奉行人にあらねば、大かたの座興はゆるすべし、醉を盡くして唄ふべく舞ふべしとて、我慰むほどのことは、彼等にも許し、家内は其日他所へ行きて、奉行人の遠慮をさけぬ、されども勤めかた悪しくして家風をみだし貨財を私する者などあれば、忽ち暇をつかはすを例とし、家法は早く人を取り立て分家せしむることをむねとしければ、分家はいよ〳〵増して本家は益々繁榮しけり



『交詢』欄開始社告

新に『交詢』の一欄を増設す、こは愛讀諸君及社會を利益する微意に出でたるものにして本社は及ぶ丈の盡力を以て諸君の質問に答ふべし但し家庭の實用に資するの目的なるを以て字義又は故事又は專門の學術技藝等に關する事件は答辨の要なし

一衛生に關する事譬へば小兒養育、養育の具、時候の衛生、疾病、治療法、藥劑、病院、看護等に關する質問

一教育に關する事譬へば小兒教育、教育書類、教育の品具、學校等に關する質問

一衣食住に關する事、必用諸道具又は臺所品の得失善悪、購買法、廢物利用、素人料理、食品の購買法、其得失善悪、衣服の購買法、其得失善悪、衣服の取合せ法、時々の流行等即ち簡易生活及家事經濟一切に關する質問

一家庭的手藝に關する質問

一家畜又は園藝等に關する質問

一家庭理財に關する事譬へば貯金、銀行、保險等に關する質問

一職業に關する事譬へば内職又は婦人的職業に關する質問

一其他家庭實用に關する諸種の質問

家庭雜誌社

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見るべし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	島居徳兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

（明治二十五年九月十四日遞信省認可）（明治三十年六月十日發兌）東京市京橋區西紺屋町二十六七番地株式會社秀英舍印行